

教会生活と宣教における神のことば

世界代表司教会議第 12 回通常総会

提題解説 ( Lineamenta )

2007 年 5 月

カトリック中央協議会 司教協議会秘書室研究企画 訳

## 目次

序文	1
序論 なぜ神のことばについてのシノドスを行うのか	4
序論についての質問	6
第1章 啓示、神のことば、教会	7
まず神が語られる 神のことばによる神の啓示	7
人間は啓示を必要とする	7
神のことばは人間の歴史と結び合わされながら、人間の歴史を導く	8
イエス・キリストは人となった神のことばであり、啓示の完成である	9
交響曲としての神のことば	9
神のことばにこたえる人間の信仰。聞くことに示される信仰	11
マリア すべての信者にとっての、みことばを受け入れるための模範	11
教会にゆだねられた神のことばは、すべての世代の人に伝えられる	12
教会における聖伝と聖書 神のことばというゆだねられた唯一の遺産	12
靈感を受けた神のことばである聖書	13
緊急に必要な課題 教会の中で神のことばを解釈する	14
旧約と新約 唯一の救いの営み	15
第1章についての質問	15
第2章 教会生活における神のことば	17
教会は神のことばによって生まれ、神のことばによって生きる	17
神のことばは歴史を通して教会を支える	17
聖霊の祈りの力によって、神のことばは教会生活のあらゆる側面に行き渡り、それらを生かす	18
教会はさまざまなしかたでみことばによって養われる	18
a 典礼と祈り	19
b 福音宣教と信仰教育	19
c 釈義と神学	20
d 信者の生活	21
第2章についての質問	22
第3章 教会の宣教における神のことば	24
教会の使命は、人となった神のことば、キリストを宣べ伝えることである	24
あらゆる時代のすべての人は、神のことばに近づくことができなければならない	25
神のことば キリスト者の一致の恵み	26
神のことば 諸宗教対話のための光	26
a ユダヤ教徒との対話	26

b 諸宗教対話	27
神のことは 現代世界のパン種	27
神のことはと人間の歴史	28
第3章についての質問	28
結び	30
信者の生活の中で神のことはを聞く	30
質問一覧	31
注	35
訳注	40

# 教会生活と宣教における神のことば

## 世界代表司教会議第 12 回通常総会 提題解説 (Lineamenta)

### 序文

「というのは、神のことばは生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と魂、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです」(ヘブライ 4・12)。

神のことばは、救いの歴史を通じて、生きた力として自らを示しました。いのちの源(ルカ 20・38 参照)である神は、進んでご自身を示してください。神のことばは、手ずから造られた(ヨブ 10・3 参照)人間に向けられています。人間は、造り主にこたえ、対話するために造られたからです。ですから、神のことばは、創造の最初の瞬間から地上での旅路の終わりまで、常に人類と共にいます。神のことばはさまざまなかたで現されますが、受肉の神秘において頂点に達します。受肉において、聖霊の力によって、神であるみことばは人となったからです(ヨハネ 1・1、14 参照)。死んで復活したイエス・キリストは、「生きている者」(黙示録 1・18)であり、永遠のいのちのことばをもっておられる方です(ヨハネ 6・68 参照)。

神のことばは鋭利です。それはすべての人の生活を照らし、従うべき道を示します。このことは十戒の内にはっきりと示されます(出エジプト 20・1 - 21 参照)。イエスはこの十戒を神への愛と隣人への愛の掟にまとめました(マタイ 22・37 - 40 参照)。真福八端(ルカ 6・20 - 26)はキリスト教的生活の理想です。キリスト教的生活は、神のことばを聞くことの内に行われるものだからです。神のことばは心の思いを探り、善を行うように人を促し、人を罪から清めます。神は、聖性へと招かれている罪人に語りかけながら、罪人が罪の生き方から立ち帰るように勧めます。「あなたたちは悪の道を離れて立ち帰らなければならない。わたしがあなたたちの先祖に授け、またわたしのしもべである預言者たちを通してあなたたちに伝えたすべての律法に従って、わたしの戒めと掟を守らなければならない」(列王記下 17・13)。福音において、主イエスも同じように招きます。「悔い改めよ。天の国は近づいた」(マタイ 3・2)。聖霊の恵みにより、神のことばは悔い改める罪人の心を貫き、神の教会における神との交わりを回復します。罪人の回心は天に大きな喜びをもたらします(ルカ 15・7 参照)。教会は、復活した主の名によって、「罪のゆるしを得させる悔い改め」を「あらゆる国の人びとに」(ルカ 24・47) 宣べ伝える使命を果たし続けます。教会は、神のことばに聞き従いながら、謙遜と回心の道を歩みます。それは、花婿であり主であるイエス・キリストに常に忠実な者となり、より大きな確信と真心をもってイエス・キリストのよい知らせを宣べ伝えるためです。

神のことばは力があります。それは、太祖や預言者たちの個人的な生き方に示され、また旧約と新約の選ばれた人びとの歴史を通じて見られる通りです。イエス・キリストはこのことをまったく独自のしかたであかしします。神のことばは肉となって「わたしたちの間に宿られた」(ヨハネ 1・14)。イエス・キリストは、ご自身の教会を通じて、神の国を宣べ伝え、病人をいやします(ルカ 9・2 参照)。教会は、この救いのわざを、みことばと秘跡、特に聖体を通じて実現し続けます。聖体は教会生活と宣教の源泉であり頂点です。聖体において、聖別のことばは、聖霊の恵みによって、パンを主のからだに、ぶどう酒を主の血に変える力を示します(マタイ 26・26 - 28、マルコ 14・22 - 23、ルカ 22・19 - 20 参照)。それゆえ神のことばは人類と神の間の交わりだけでなく、人びとの間の互いの交わりの源泉です。人間は皆、主に愛された者だからです。

聖体と神のことばとのこの密接なつながりが、次の世界代表司教会議(シノドス)通常総会のテ

テーマが選択された理由でした。こうしてシノドス総会で神のことは扱ってほしいという以前からの要望が満たされることになりました。したがって、2005年10月2日から23日まで開催された「聖体 教会生活と宣教の源泉と頂点」に関するシノドスの後、自然に「教会生活と宣教における神のことは」に注意が向けられることになりました。それは、パンとみことばによる唯一の食卓の意味をより完全に検討するためです。今回のテーマが部分教会の中で優先事項として考えられていることは、部分教会の司教、司牧者から示されました。実際、次回のシノドスのためにこのテーマを選んだのは、団体的な議論の結果でした。慣例に従い、シノドス事務総局は、教皇ベネディクト十六世の要請により、カトリック教会の全司教からテーマの選定について意見を集めました。表現の違いや、扱う側面は異なりますが、自主権を有する東方カトリック教会、司教協議会、ローマ教皇庁諸省長官、修道会総長連合からの回答の中で、優先して取り上げるべきテーマとして示されたのは、「神のことは」でした。多くの検討資料がシノドス事務総局第11回通常顧問会によって分析されました。この顧問会はある意味でシノドス総会全体を代表します。実際、顧問会の12名の委員は、シノドス第11回通常総会参加司教の中から選出されました。「世界代表司教会議規則」の規定に従い、顧問会の3名の委員は教皇ベネディクト十六世によって任命されました。通常顧問会の実り豊かな議論の結果、テーマの選択肢は3つにしばられ、それが事務総局から教皇に提出されました。

シノドスの主宰者である教皇は、2006年10月6日に自らの決定を発表しました。続いて事務総局通常顧問会はこの「提題解説」作成作業を開始しました。この「提題解説」の目的は、扱われるテーマ、すなわち「神のことは」を簡潔に提示すること、また、教会生活と宣教において神のことはがもつ積極的な側面を明らかにすることです。もちろん、さまざまな困難を示したり、少なくとも教会の善益と世界における教会生活にとって徹底的な検討を必要とするような、ある種の分野も無視しません。したがって、この「提題解説」は『啓示憲章』をしばしば引用します。こうして、「提題解説」は特別な意味で、公会議教父が採用した方法に従います。すなわち、神のことはを確信をもって宣べるために、神のことはをうやうやしく聞くということです（『啓示憲章』1参照）。この「提題解説」は、『啓示憲章』を司牧的な観点から再読するだけでなく、これに続いて出された、教会の教導職の宣言も引用します。教会の教導職は、聖伝と聖書に含まれる、ゆだねられた聖なる信仰の遺産を真正なしかたで解釈するからです。

全教会においてこのテーマを考察し、議論することを促すために、この「提題解説」には、各章で扱われた内容に関連する、具体的な質問も書かれています。上記の諸団体は、**今年の11月末までに**これらの質問に対する回答を書面で提出しなければなりません。その後、通常顧問会は、専門家の助けを得ながら、提出された回答を検討し、それを、伝統的に「討議要綱」(Instrumentum Laboris)と呼ばれる第二の文書に順序立ててまとめます。この「討議要綱」が、神が望まれるなら2008年10月5日から26日まで開催される予定の、世界代表司教会議第12回通常総会の議題となります。

教会の創立以来、神のことは教会のいのちそのものでした。聖霊の力によって受肉したみことばであるキリストにおいて、教会は「いわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるし」(『教会憲章』1)です。神のことははまた、教会が近くの人にも、遠くの人にも宣教を行うことを永遠に促します。それゆえ教会は、主イエスの命令に従い、聖霊の力に信頼しながら、絶えず宣教し続けます(マタイ18・19参照)。

主の身分の低いしもべである、聖なるおとめマリアの模範に従いながら、シノドスは神のことはを驚きをもって再発見することを望みます。神のことはは、教会の中心で、教会の典礼と祈り、福音宣教と信仰教育、釈義研究と神学、個人と共同体の生活、また、福音によって清められ、豊かにされた人類の諸文化において、生きていて、鋭利で、力のあるものだからです。キリスト信者は、神のことはに促されながら、自分の希望について説明を要求する人にこたえ(一ペトロ3・15参照)。

「ことばや口先だけでなく、行いをもって誠実に」(一ヨハネ 3・18) 隣人を愛するように整えられます。こうして彼らのよいわざは世にあって光のように輝き、神の栄光を映し出し、すべての人が天におられるわたしたちの父をあがめるようになります(マタイ 5・16 参照)。そこから、神のことばは教会生活全体を照らし、教会がパン種として行動できるようにします。それは、世がより公正かつ平和で、いかなる暴力もなく、愛の文明の建設に開かれたものとなるためです。

「『主のことばは永遠に変わることがない』。これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされたことばなのです」(一ペトロ 1・25)。シノドスのテーマの考察は謙虚な祈りとなります。どうか、神のことばを再発見することが、歴史を通じた教会と社会における人類の歩みを照らしますように。人類はしばしば熱心に、また確信をもって「義の宿る新しい天と新しい地とを」(二ペトロ 3・13) 待ち望んでいるからです。

バチカンにて、2007年3月25日

シノドス事務局長

シサク名義大司教 ニコラ・エテロヴィッチ

## 序論

### なぜ神のことばについてのシノドスを行うのか

「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、いのちのことばについて。このいのちは現れました。御父とともにあったが、わたしたちに現れたこの永遠のいのちを、わたしたちは見て、あなたがたにあかしし、伝えるのです。わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりをもつようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです」(一ヨハネ 1・1-4)。

1 「初めにことばがあった」(ヨハネ 1・1)、「わたしたちの神のことばはとこしえに立つ」(イザヤ 40・8)。世と人類が創造されたときからおられた神のことばが、歴史を始められます。「神はいわれた」(創世記 1・3、6 以下)。神の子イエス・キリストの受肉 この、歴史においてもっとも決定的な出来事が、神のことばによって告げられます。「ことばは肉となった」(ヨハネ 1・14)。神のことばは、歴史の終わりに、わたしたちが永遠のいのちにおいてキリストと出会うことを約束します。「然り、わたしはすぐに来る」(黙示録 22・20)。

神のことばはこの上なく確実です。神はその限りない愛によって、神のことばをすべての時代の人に与え、彼らが神のことばをあかしできるようにしたからです。シノドスは、神の最高のたまものである、このみことばの神秘をあがめ、感謝し、黙想し、教会に属するすべての人とすべての善意の人に告げ知らせることを望みます。

2 さまざまな形で示されているように、現代人は神のことばを聞き、神と語りたいと強く望んでいます。現代のキリスト信者も、生活の源泉として、また、個人的なしかたで主と出会う手段として、神のことばを熱心に求めています。

じつにこうした個人的な出会いを通じて、目に見えない神は、「大きな愛によって、あたかも友に対するように、人間に話しかけ、彼らと住まいを共にしている。それは彼らを自分との交わりに招き、これにあずからせるためである」(1)。このような神の寛大な啓示は、恵みによって絶えず行われます。

この交わりは「聖霊のわざ」によって行われます。聖霊は、みことばによって、教会生活と宣教を刷新しようと望まれます。そして、教会を絶えざる回心へと招き、すべての国民に福音の知らせをもたらすように遣わします。それは彼らが「いのちを受けるため、しかも豊かに受けるため」(ヨハネ 10・10)です。

3 主キリストの位格が、神のことばの核心です。教会は歴史を通じて絶えずみことばの神秘を体験し、考察してきました。「聖書が神のことばでなければ、どうしてそれを信じるのでしょうか。たしかに預言者たちは多くのことを書きました。しかし、聖書全体に書かれているのは神のことばだけです。信じる者は、この唯一のみことばを、正しい夫である神が与える種によって受胎し、それを自らの口から実り豊かに語ります。それは、いわば、みことばを生み、しるし、すなわち文字にとどめ、こうしてそれがわたしたちにも伝えられるようにするためです」(2)。

第二バチカン公会議は『啓示憲章』の中で、神のことばについての教会の教導職について荘厳に語り、説明し、実践のための指示を与えています。『啓示憲章』は3つの回勅による長期にわたる研究と発展をまとめました。すなわち、レオ十三世の『プロヴィデンティッシムス・デウス』、ベネディクト十五世の『スピリトゥス・パラクリトゥス』、そしてピオ十二世の『ディヴィノ・アフランテ・

スピリトゥ』(3)です。『啓示憲章』はまた釈義と神学における新たな段階を示しました。このような新たな釈義と神学は信者の霊的経験によってさらに豊かなものとされ、時宜を得て1985年のシノドス(4)と『カトリック教会のカテキズム』でも用いられました。公会議後、普遍教会と地方教会の教導職はみことばに触れることの重要性を強調しました。神のことばは「教会を新たな霊的な春へと導く」(5)と確信したからです。

神のことばの息吹に支えられながら、今回のシノドスは、これまで行われたシノドス(1965 - 2006年)との密接な関連において開催されます。このシノドスは信仰の基盤を見つめるとともに、人びとが聖書(ヨシュア24、ネヘミヤ8、使徒言行録2参照)と教会の歴史の中で、みことばとどのようなしかたで出会ったかを示そうと努めます。

4 さらに特別な意味で、シノドスはこれまでのシノドスに続いて、聖体と神のことばの内的なつながりを明らかにしたいと望みます。教会は「神のことばの食卓とキリストのからだの食卓とから」同じ一つの「いのちの糧」(6)を得なければならないからです。このシノドスが深く望み、第一に目指すことは、聖書と聖体の内におられる主イエスにおいて、神のことばと完全なしかたで出会うことです。聖ヒエロニモはこう述べます。「主の肉はまことの食物であり、主の血はまことの飲み物です。それはわたしたちがこの世で得る唯一のよいものです。聖体だけでなく、聖書を読むことも、わたしたちに主の肉を食べさせ、主の血を飲ませます。実際、聖書を知ることから得られる神のことばは、まことの食べ物であり、まことの飲み物です」(7)。

第二バチカン公会議から40年が過ぎて、公会議の『啓示憲章』がわたしたちの教会共同体の中でどのような成果を生んだか、また、この公会議文書がほんとうに受け入れられたかが問われています。神のことばに関して、神の民の中で多くの積極的な意味のあることが行われたことは明らかです。たとえば、次のようなことがらです。典礼、神学、信仰教育における聖書の刷新。聖書使徒職と共同体・運動団体の努力による聖書の普及と実践。そして、現代のマス・メディアの手段がますます用いられるようになったことです。

しかしながら、いくつかのことが「問題」ないし「未解決の課題」となっています。啓示と神のことばについての教えに関する無知やあいまいさは、大きな問題です。聖書に触れることのない多くのキリスト信者が依然として存在するとともに、聖書がふさわしいしかたで用いられない危険も常にあります。神のことばに関する真理を欠くならば、人びとは生活と思考において相対主義へと引き込まれます。このような状況から、神のことばに関する教会の教えを完全なしかたで知ることが緊急に求められています。聖書に触れる機会をすべてのキリスト信者に与えるための適切な手段を用いることも必要とされています。教会は、現代において聖霊が教える新たな手段を採用することによって、さまざまな形で示された神のことばを、教会の中で知り、識別し、愛し、深め、体験できるようにしなければなりません。こうして神のことばはすべての人にとって真理と愛のことばとなるのです。

5 今回のシノドスの「目的」は、主として司牧的なものです。すなわち、教理的基盤を徹底的に検討することによって、神のことばとの出会いを広げ、強めること、またそのための方法を示せるようにすることです。こうしてキリスト信者とすべての善意の人びとが、神のことばを日々の状況においていのちの源として体験し、また、真実の可能な方法を用いて神のことばを聞き、神と語り合うことができるようになることです。

具体的には、このシノドスは次のような多くの目的をもっています。神のことば、聖伝、聖書と教導職といった、啓示に関する基本的な真理を明らかにできるようにすること。こうしたことから、真の力強い信仰生活を促し、保証するからです。聖書を尊重し、深く愛する心を高めること。それは、「キリスト信者に、聖書に近づく多くの機会が与えられる」(8)ためです。



典礼と信仰教育、特に「靈的読書」(レクチオ・ディヴィナ)によって、神のことばをあらためて聞くこと。この「靈的読書」(レクチオ・ディヴィナ)はさまざまな状況に合ったものとしなければなりません。世界の貧しい人に慰めと希望のみことばを与えること。

今回のシノドスは、神の民に神のことばを糧として与えることを望みます。シノドスが目指すのは、聖書解釈学の適切な方法を奨励し、福音宣教とインカルチュレーションを正しく導くことです。シノドスはまた、エキュメニカル対話の促進も目指します。エキュメニカル対話は神のことばを聞くことと密接に関連するからです。また、キリスト教徒とユダヤ教徒の会合・対話(9)、さらに、広く諸宗教対話・異文化対話の促進も目指します。このシノドスは次の3つの分野を取り上げることによって、この課題を達成することを提案します。

1. 啓示、神のことば、教会(第1章)
2. 教会生活における神のことば(第2章)
3. 教会の宣教における神のことば(第3章)

このようにして、神のことばの根源的な諸要素を、教会の活動と結びつけることができます。

この「提題解説」は、神のことばとの出会いに関するあらゆる場合・形式を扱おうとするものではありません。むしろこの文書は、第二バチカン公会議の教えに基づきながら、神のことばの本質的な性格を述べ、教理と実際の経験の内容を共に強調しつつ、皆様がもっと詳しい情報を提供して下さるよう促すのです。

#### 序論についての質問

1. 神のことばについての今回のシノドスに特に現代的な意味を与えるような、どのような「時のしるし」が皆様の国にありますか。人びとはこのシノドスに何を期待していますか。
2. 前回の聖体についてのシノドスと、神のことばについての今回のシノドスにはどのような関係がありますか。
3. 皆様の部分教会で、聖書の体験や実践は行われていますか。それはどのようなものですか。聖書を研究するグループは存在しますか。それはどのようなもので、どんな活動をしていますか。

## 第1章 啓示、神のことば、教会

「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました」(ヘブライ1・1-2)。

まず神が語られる 神のことばによる神の啓示

6 「神はその愛と英知によって、ご自分を啓示し、み旨の秘義を明らかにしようとした」(10)。第二バチカン公会議は、神の神秘を人間のことばと冷やかで恣意的な報告に押し込める危険に直面しながら、『啓示憲章』の中で、教会が幾世紀にもわたって宣言してきた信仰の要約をみごとにし、かたで正確に述べました。神は無償かつ直接的なしかたでご自身を知らせました。それは、ご自身が造られた人類および世界と、真理と愛に基づく人格的な関係に入るためでした。神は、「互いに関連したわざとことばをもって」(11) 宇宙と歴史の目に見える事物においてご自身を現されました。こうして神は「啓示の経緯」、すなわち、人類の救いと、また、人類の救いを通じての全被造物の救いを目指す計画を示しました。同時にこの啓示は、三位一体の神についての真理と、神に愛され、永遠の幸福を約束された人類についての真理をも伝えました。この神の啓示はイエス・キリストの人格において輝かしい頂点に達します。イエス・キリストは「仲介者であり、同時に全啓示の完結である」(12) 方だからです。

人間どうしの親しい関係に似た深い交わりに基づく、この無償の自己伝達は、神ご自身とそのみことば、すなわち「神のことば」によって特徴づけられます。根本的な意味でいえば、この自己伝達は三位一体の神の人格的なわざです。神は愛し、愛するがゆえに「語る」からです。神が人類に語りかけたのは、すべての人が神の愛を知り、神にこたえることができるようにするためです(13)。聖書を注意深く読めばはっきりわかる通り、こうした自己伝達は、創世記から黙示録に至るまで、絶えず行われています。神のことばが特に「秘跡中の秘跡」(14) である感謝の祭儀や他の秘跡の中で読まれ、告げられるとき、主ご自身がわたしたちに呼びかけます。神とわたしたちの間の交わり、またわたしたち一人ひとりと他の人との交わりという、深く人格的な出来事に「あずか」りなさいと。まことに神のことばは力があり、いわれたことを成し遂げられます(ヘブライ4・12 参照)。

人間は啓示を必要とする

7 人間は、神が与えた人間的手段、すなわち被造世界(「自然という書物」[liber naturæ]) のみによって神を知ることができます(ローマ1・20 参照)。罪の結果、歴史のさまざまな状況の中で、この神についての知識はあいまいで不確かなものとなり、多くの人から否定されるまでになりました。しかし神は人類を見捨てません。神は一人ひとりの人に、光と救いと平和への深いあこがれを抱かせます。たとえこのあこがれが常に自覚されることがなくてもです。福音を全世界に宣べ伝えることは、人びとがこの造り主との絆を自覚するのを助け、宗教的・文化的価値観を生み出します。こうした価値観は、多くの現代人にイエス・キリストの神を探求するよう強く促します。

神の民は、純粹で確かな信仰への大きな望み あるいは深いあこがれ を抱いているように思われます。神の民は、神と人間に関する無知と混乱と疑いを取り払うことによって、科学技術が発展した時代にあって、神に関する真理を見分け、強めます。この深く広いあこがれ、ないし希求は、神ご自身が人類のために行った啓示に関する真理を認め、神のことばを聞くように人間の心を開きます。これがシノドスのテーマの基盤です。シノドスは、このテーマの司牧的意味を探求することを通じて、新しい福音宣教の進展を保證また推進し、エキュメニズムと諸宗教対話・異文化対話のための貴重な情報を集めます。

神のことは人間の歴史と結び合わされながら、人間の歴史を導く

8 ある文化に属する人びとは、すべては自分たちに基づくと考えます。そこから彼らは、自分が自分の運命の支配者だと考えます。こうした態度をとると、何者かが世界に来て、対話を行い、人生に意味を与えるということを受け入れるのは困難です。こうした考え方は、神に関する間違っただ思想や、さまざまな疑いの中にもしばしば見られます。しかし、ご自分のみことばの真理を語らずにはいられない神は、みことばは友であり、人びとの善益のために語られるのだということを、一人ひとりの人に約束します。神のことは、人間の自由を尊重しながら、ご自分に忠実に耳を傾け、黙想することを求めます。まことに神のことは「一人ひとりの人が抱える問題に直面させ、それにこたえ、価値観を広げ、共に願いをかなえるものでなければなりません」(15)。わたしたちは『啓示憲章』からあらためて次のことを学びます。神のことはすべての人間のことはと人間の働きかけに先立ちます。神がみことばを告げたのは、思いがけない真理と意味の地平に向けて人間の心を開くためでした。創世記 1、ヨハネ 1・1 以下、ヘブライ 1・1、ローマ 1・19 - 20、ガラテヤ 4・4、コロサイ 1・15 - 17 に述べられる通りです。大聖グレゴリオはいいいます。「聖書はわたしたちの貧しいことばを使うまでに降られた。それは、わたしたちが言い表しがたい神にまで昇ることができるようにするためです」(16)。

神は初めから「至高の救いへの道を開く」(17) ことを望まれました。聖書は、神のことが最初から人類との対話を行ったことを示します。この対話は生き生きとしたもので、時として悲劇的ですが、最終的には勝利をもたらします。神に選ばれた民イスラエルの歴史の中で、最高の啓示はイエス・キリストにおいて行われました。イエス・キリストは肉となった永遠のみことばだからです(ヨハネ 1・14 参照)。聖エフラームはいいいます。「わたしは造り主であるみことばを思うとき、それを荒野で民に与えられた岩になぞらえます。岩から民に不思議なしかたで水が湧き出たのは、岩の中に水が蓄えられていたからではありません。岩の中に水はありませんでしたが、大水がそこから湧き上がりました。同じように、みことばは無からそのわざを行われます。あなたの樂園を受け継ぐにふさわしいとされた人は幸いです。モーセはその書の中で、自然の創造について語りました。それは、自然と聖書がともに造り主をあかしすることができるためです。自然の場合は、人がそれをを用いることによって。聖書の場合は、人がそれを読むことによって。あらゆるところであかしが行われています。あかしはいつの時代にも、どんなときにも行われます。こうしてあかしは、造り主に感謝することのない不信仰者への反論となります」(18)。

この神のことはに関する思想は、大きな司牧的意味をもっています。神のことはの歴史は人間の歴史と密接に結び合わされています。実際、神のことはの歴史は、人間の歴史の基盤そのものです。それゆえ人間の歴史は、人間の思想、ことば、活動だけから成るではありません。自然と文化の中には、神のことはの生き生きとした痕跡が認められます。みことばが人間の認識に真の価値を与えるだけではありません。人間の知識そのものも、みことばのあり方を示すのを助けます。また、人間の本性をとったみことばも、初めから人間を中心とした思想を示します。みことば自身が、特別なしかたで民を選びました。それは自由と救いの道と共にし、神が忠実で忍耐強く、「インマヌエル」(イザヤ 7・14) すなわち「われらと共におられる」(イザヤ 8・10。ローマ 8・31、黙示録 21・3 参照) 方であることを示すためです。このことからわかるのは、神のことは、聖書の証言を通じて、すべての時代の人びとの思想と表現の中に反映されているということです。こうした表現は、時には歴史の暗い出来事の中で助けを求める叫び声のように、ひしがれた苦しみの中で示されることもあります。しかしそれは歴史に際立った影響も及ぼします。聖人の生涯がすばらしいしかたで示す通りです。聖人たちは、神のことはを本心から受け入れ、聖霊のたまものを特別なカリスマとして生きることによって、神のことはの内に根本的な力が含まれることを示しました。

現代の人は、キリスト教の信条に表された公的啓示と、私的啓示の正しい関係を理解するための

助けを必要としています。もちろん、この二つの啓示が共に真正な信仰にとって重要な意味をもつことはいうまでもありません。

イエス・キリストは人となった神のことばであり、啓示の完成である

9 「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました」(ヘブライ 1・1 以下)。多くのキリスト信者は、神の啓示においてイエス・キリストの人格がもつ中心的な意味を自覚しています。しかし、キリスト信者は、そのことが重要である理由を常に知っているわけではありません。また、どのような意味でイエス・キリストが神のことばの中心であるかを理解しているわけでもありません。そこから、彼らは聖書を読むときに、真の意味でキリスト教的な読み方をすることがなかなかできません。

だから『啓示憲章』は、神がまったく思いがけない出来事が起こることを望まれたと述べます。「実際、神は御子、すなわち、すべての人を照らす永遠のみことばを遣わした。それは、人間の間にとどまって神の秘義を人間に示すためである(ヨハネ 1・1-18 参照)。それで、人となったみことばであり、人間に遣わされた人間であるイエス・キリストは、『神のことばを語り』(ヨハネ 3・34) 父から成就すべくおのれに託された救いのわざを遂行する(ヨハネ 5・36、17・4 参照)。(19)。それゆえイエスは、地上での生活と栄光の時において、神のことばの目的、意味、歴史と計画のすべてを受け取り、実現しました。そこで聖イレネオは述べます。キリストは「自身をもたらしことによって、すべての新しさをもたらしした」(20)。

司牧的な意味でいえば、この真理から次のことが必要となります。すなわち、聖書に述べられた、教会の信仰における神のことばのさまざまな意味をどうまとめればよいかを理解することが必要です。聖書の中でイエス・キリストは永遠の神のことばとして示されます。この永遠の神のことばは、創造において輝き出し、預言者の告知の中で歴史的な性格を与えられ、イエスの人格において完全に現され、使徒の声の中に反響し、現代の教会の中で宣べ伝えられます。一般的な意味で、神のことばは、「みことばであるキリスト」です。この「みことばであるキリスト」が、聖霊の与える靈感を通じて、すべての解釈の鍵となります。「神の言理(ロゴス) 元(はじめ)のうちに神とともに(あった)言理(ロゴス)は、個々の理念が全言理(ロゴス)の部分となすという、あまたの理念(テオレマタ)を包含する、ただ一つの(言理[ロゴス])です。……ですから、ご自分についてのあかしであるものとしての(聖)書(の諸巻)にわたしたちを向けておられるのであれば、ある(巻)に向け、ある巻にはそうではないというのではなく、ご自分についてあかしするものとして、すべてに(わたしたちを向けておられる)」(21)のです。こうして多様性の中に連続性を見いだすことができます。

教会の宣教の本質は、みことばの豊かさです。教会は、イエス・キリストの内に自らを理解することができるなら、自らが神のことばによって生まれ、新たにされることを知ることができます。しかし神のことば(すなわちイエス)を、イエスご自身がいわれたように、「聖書に従って」(ルカ 24・44-49 参照)理解しなければならないということも真実です。「みことばであるキリスト」は、旧約の神の民の歴史の中におられます。旧約はキリストがメシアであることをあかしするからです。「みことばであるキリスト」は、教会の歴史の中で今も共におられます。教会は、「みことばであるキリスト」を説教の中で告げ知らせ、聖書によって黙想し、この方との友愛と、この方が人生を導いてくださることを体験します。聖ベルナルドはいいます。「みことばの受肉の計画において、キリストは聖書全体の中心です。神のことばは、すでに旧約の中でも聞くことができましたが、キリストにおいて目に見えるものとなったのです」(22)。

交響曲としての神のことば

10 これまでの部分で考察したことによって、教会が啓示の進行において神のことばに与えたさまざまな意味を数え上げることができます。神のことばは多くの楽器で演奏される交響曲になぞらえることができます。神はそのことばを、多くのかたちで、また多くのしかたで語られたからです(ヘブライ 1・1 参照)。啓示の歴史は長く、その使者もさまざまです。しかしこの歴史は、意味と機能の序列によって常に特徴づけられます。それゆえ、みことばの類比的な意味について語るができます。

a 啓示において、神のことばは**永遠の神のことば**です。この「永遠の神のことば」は、至聖なる三位一体の第二の位格であり、御父の子、三位一体の内また外の交わりの基盤です。「初めにことばがあった。ことばは神と共にあった。ことばは神であった。このことばは、初めに神と共にあった。万物はことばによって成った。成ったもので、ことばによらずに成ったものは一つもなかった」(ヨハネ 1・1 - 3。コロサイ 1・16 参照)。

b それゆえ**造られた世界**は「神の栄光を物語り」(詩編 19・1)ます。万物は神の声です(シラ 46・17、詩編 68・34)。初めに神はみことばによって宇宙を創造し、その知恵によって被造物をしるしづけられました。被造物の意味を解釈するわざは人間にゆだねられました。人間は神の像と似姿に従って造られたからです(創世記 1・26 - 27、ローマ 1・19 - 20 参照)。実際、人間はみことばによって、神と被造物との対話を行うよう招かれます。こうして神は全被造物、なかならず人間において「自らについての恒久の証明を与えた」(23)のです。

c 「ことばは肉となった」(ヨハネ 1・14)。優れた意味での神のことば、すなわち究極的かつ決定的なみことばは、**イエス・キリスト**です。イエス・キリストの地上での存在と宣教と生涯は、御父の計画に従って、密接に結ばれています。その頂点は過越です。しかし、この計画はイエスが国を御父に引き渡されるときに初めて実現します(一コリント 15・24 参照)。イエス・キリストは、人類に与えられた神の福音です。

d 受肉した御子であるみことばという観点から見ると、御父はかつて預言者たちを通じて先祖に語られました(ヘブライ 1・1 参照)。使徒たちは聖霊の力によってイエスとその福音を宣べ伝え続けます。こうして、神のことばへの奉仕において、人間の**ことば**が神のことばとして用いられます。神のことばは**預言者と使徒の告知**の中で語られるからです。

e 神の靈感によって書かれた聖書は、「みことばであるイエス」を、預言者と使徒のことばに結びつけます。聖書そのものが、このことが真実であることを証言します。聖書は、神の靈感によって書かれた神のことばを含んでいるので、真の意味で神のことばだということが出来ます(24)。聖書のすべての箇所は、みことば、すなわちイエスに向けられています。なぜならイエスはこういわれたからです。「聖書はわたしについてあかしをするものだ」(ヨハネ 5・39)。神の靈感のたまものによって、**聖書の諸巻**は、他の書物なし聖典がもたない、直接的で具体的な呼びかけの力を有します。

f しかし、神のことばは書物の中に閉じ込められているものではありません。啓示は最後の使徒の死で終わったとはいえ(25)、啓示されたみことばは教会の歴史を通じて宣べ伝えられ続け、人びともそれに耳を傾け続けます。教会は、世の期待にこたえて、世にあってみことばを宣べ伝える責務をもちます。こうしてみことばは、**生き生きとした説教**や、福音に奉仕する他の多くの形を通じて歩み続けます。説教は、教会という手段を通じて、イエス・キリストにおいて、生きた神から生きた人に語られた神のことばです。ここから、神の啓示が説教されるとき、真の意味で「神のことば」と呼ぶことのできる何かが教会の中で実現することがわかります。

神のことばは、人間の間で行われる真の会話のすべての特質を示します。たとえば、神のことばは教えます。神はご自身の真理を伝えるからです。神のことばは何かを表現します。神はその思い、愛、行動を示すからです。最後に神のことばは神から人への呼びかけです。人は信仰をもってこれを聞き、これにこたえなければなりません。

司牧者の責務は、信者が神のことばに関して調和のとれた考え方をもちょうに導き、そのために、誤りや単純化、またあいまいさを伴う考え方を避けることです。次のことを強調しなければなりません。神のことばが本来、三位一体の神とその啓示の神秘と密接な関係をもつこと。神のことばが被造世界の中で示されること。神のことばは人間の生活と歴史の中に萌芽として存在すること。神のことばはイエス・キリストにおいて最高の表現を見いだすこと。そして、神のことばは誤ることなく聖書の中で証言され、教会の生きた聖伝の中で伝えられることです。人間のことばを用いることは、神のことばの神秘に属するので、言語やコミュニケーションに関する学問の研究に注目することが必要です。

神のことばにこたえる人間の信仰。聞くことに示される信仰

11 「啓示する神に対しては『信仰の服従』を示す必要がある」(26)。人は「自由におのれをまったく神にゆだね」(27)ながら、みことばによってご自身を与えられる神に耳を傾けなければなりません。そこから人は、神との完全な交わりへの招きをまったく受け入れ、自分の意志を共同体とすべての信者のために用いるようになります(28)。こうした信仰と交わりの態度は、説教と聖書朗読におけるあらゆるみことばとの出会いにおいて見いだされます。そのため、『啓示憲章』は、聖書に近づく際、神のことばについて広く認められていることを述べます。「神は……あたかも友に対するように、人に話しかける。……それは、彼らを自分との交わりに招き、これにあずかせるためである」(29)。「実際、聖書において、天にまします父は、深い愛情をもって、常に自分の子どもたちと会って、互いに語り合うのである」(30)。啓示は愛の交わりです。この交わりは、しばしば聖書の中で「契約」(創世記 9・9、15・18、出エジプト 24・1-18、マルコ 14・24)ということばで表されます。

ここに司牧的な意味で注目すべき重要な点が見られます。すなわち、信仰は、あらゆるしるしと言語を通じて神のことばと関わるということです。みことばは、聖霊の力により、教えまたは教理の定式を通じて、信仰に真理を伝えます。信仰は、みことばが回心を強く促す力であることを認めます。みことばは、信者の生活の中でのさまざまな問題に答えるための光です。みことばは、現実を正しくまた知恵をもって識別するための導きです。みことばは、みことばを読み、語るだけでなく、それを「行う」(ルカ 8・21)よう招きます。最後に、みことばは、絶えざる慰めと希望の源です。そこから、信仰の論理に従って、信者の生活の中で神のことばが何よりも大事であることを認め、保証するという務めが生じます。そのため、教会が宣べ伝え、理解し、説明し、生きている神のことばを受け入れなければなりません。

マリア すべての信者にとっての、みことばを受け入れるための模範

12 ナザレのマリアは、神のことばの神秘に貫かれた歩みの中で、お告げの瞬間から、教会の師また母、そして、個人あるいは共同体全体とみことばとのあらゆる出会いの模範であり続けます。マリアは肉となったみことばを受け入れ、それを思いめぐらし、心に納め、生かしました(ルカ 1・38、2・19、51、使徒言行録 17・11 参照)。実際、マリアは聖書に耳を傾け、それを思いめぐらしました。マリアは、イエスの生涯と関わるイエスのことばおよび出来事と聖書を結びつけました。イサク・デ・ステラはいいいます。「靈感を受けた聖書の中で、教会という、母なるおとめ一般を表す意味で述べられたことは、おとめマリア個人を表す意味で理解されます。……主の遺産は、一般的な意味では教会です。特別な意味ではマリアです。そして個人的な意味では信者の魂です。キリストは9か月間、マリアの胎内という聖櫃に宿りました。キリストは世が完成するまで教会の信仰という聖櫃の中に宿ります。キリストは世々に至るまで信者の魂の知と愛の中にとどまります」(31)。

おとめマリアは、自分の周りで起こっていることを見つめ、日々の生活が求めることを生きなが

ら、自分が御子から与えられるものはすべての人のためのたまものであることを自覚することができました。マリアは、いのちのこばを何もせずに傍観するのではなく、これにあずかり、聖霊に導かれるようにと、わたしたちに教えます。聖霊は信者の中に住んでおられるからです。マリアは、自分の人生の中に神の恵みを見いだすことによって、主を「あがめ」ます。神は彼女を「祝福され」ました。なぜなら、マリアは「主がおっしゃったことはかならず実現すると信じた」(ルカ 1・45)からです。「見ないのに信じる人は幸いである」(ヨハネ 20・29)。マリアは、このイエスのこばを実行するように、すべての信者を招きます。マリアはみこばを心から祈り、愛をこめて神のこばを守り、これを愛の奉仕に変え、日常生活の中で信仰のともしびをともし続けることを知っている人の模範です。聖アンブロジオは、すべてのキリスト信者は神のこばを宿し、生むといえます。肉に従えば、キリストの母は一人ですが、信仰に従えば、キリストはすべての人の子です(32)。

教会にゆだねられた神のこばは、すべての世代の人に伝えられる

13 「神は、万民のために啓示したそのことが、永久に、かつ完全に保たれ、あらゆる世代に伝えられるよう、いともやさしく取り計らった」(33)。人類の友であり父である神は、語り続けます。啓示は終わりました。しかし、ある意味で、啓示は、神のこばが実際に現代のわたしたちに伝えられる中で続いているのです。実際、啓示は今もわたしたちを照らし、わたしたちの理解を深めることができます。だから御父は、イエスの霊を教会に与えながら、啓示の宝を教会にゆだね(34)教会を、愛をもって救いをもたらす神のこばの第一の受け手、また特別な証人とするのです。

そのため、みこばは、教会の中で、ゆだねられたままじっと動かずにいるものではありません。むしろそれは、「信仰の最高の規範」、いのちを与える力であり、「聖霊の援助によって進歩し」、「信者たちの黙想と研究」によって「理解が深くなり」、霊的生活において一人ひとりに経験され、司教によって説教されます(35)。みこばの「内に住んだ」神の人たちは、その特別な証人です(36)。教会のなすべき第一の使命が、イエスの命令に従って(マタイ 28・18 - 20 参照)神のこばを、あらゆる時代と場所において、すべての人に伝えることであるのはいうまでもありません。歴史が示す通り、この宣教は、多くの時代を経て、現代に至るまで、さまざまな困難に直面しながらも、活発かつ実り豊かに生き生きと行われ続けています。

教会における聖伝と聖書 神のこばというゆだねられた唯一の遺産

14 このテーマを扱う際に、わたしたちは神のこばがイエス・キリストについての福音あるいは「喜ばしい知らせ」であることを思い起こさなければなりません。福音としての神のこばは、使徒の宣教にゆだねられ、幾世代を通じて、二つのしかたで伝えられ続けてきました。この二つのしかたは密接に関連し合っています。その一つは、生きた聖伝の生き生きとした流れです。聖伝は、教会が「自らあるがままのすべてと、信ずることのすべて」(37)すなわち、礼拝、教理、そして教会生活によって示されます。もう一つは聖書です。聖書は、聖霊の靈感の力によって、この生きた聖伝の最初の構成要素の変わることはない性格を、書かれた文字の形で保ちます。「それで、聖伝と旧約・新約聖書は、いわば、鏡のようなもので、地上を旅する教会は、神をありのままに、顔と顔を合わせて見るときまで(一ヨハネ 3・2 参照)神にすべてのものを賜りながら、その鏡の中に神を見るのである」(38)。教会の教導職は、神のこばの上に立つものではありませんが、「書き物、あるいは口伝による神のこばを権威をもって解釈」(39)しなければなりません。

第二バチカン公会議は、聖書と聖伝の間の根本的な一致と密接な結びつきを強調します。教会は聖書と聖伝の「どちらも同じ敬謙と敬意をもって」(40)扱います。教導職は、神のこばの権威ある解釈を保証するために奉仕するという、かけがえのない使命をもっています。そのため教導職は「神のこばを敬謙に聞き、聖く保存し、忠実に説明」(41)します。

司牧的な観点からいえば、教会の教えに従うことにより、聖書と聖伝の関係ははっきりと知られ、

実生活における経験へと適用されます。たとえば、初代教会において、聖伝は聖書に先立ち、常に「聖書そのものがより深く理解され、絶えず活力にあふれたものとされる」(42) ためのいわば豊かな「土壌」となっていました。他方で『神のことは生きており、力を発揮し』(ヘブライ 4・12)、『あなたがたを造り上げ、聖なるものとされたすべての人びとと共に恵みを受け継がせることができるのです』(使徒言行録 20・32、一テサロニケ 2・13)(43)。聖書と聖伝は共に神のことは伝えるための手段です。それゆえ、聖書と聖伝の両方が「互いの内に」経験されることによって、神のことは意味と恵みは完成します。こうして聖書と聖伝は共に「神のことは」と呼ばれ、また実際に「神のことは」なのです。

この教えは司牧的実践の中で多くの重要な意味をもちます。たとえば、「聖書のみによって」(sola Scriptura) という思想は成り立ちません。なぜなら、聖書は教会と関連づけられるからです。すなわち、この教会が、聖伝と聖書を共に受け入れ、理解するのです。聖書は、わたしたちがみことばの源泉に近づくことができるための基本的な役割をもっています。こうして聖書は聖伝を正しく理解するための基準となります。

使徒伝承と、使徒伝承を解釈して現在に適用する後代の伝統と、他の教会伝承を区別することからも、実践的な意味が生じます。もう一つ考慮しなければならないのは、聖書正典を決定する際に教会が果たした決定的な働きです。こうして教会は、かつて今もこれからも流布する正典以外の書すなわち外典に対して、聖書の真正性を保証しました(73 書。うち旧約 46 書と新約 27 書)(44)。

最後に、常に念頭に置かなければならないのは、被造世界、特に人類とその歴史における神のことはさまざまなしるしによって、聖書と聖伝の間で活発に行われる、また行われなければならない対話です(45)。

教会の生きた聖伝と、「カテキズム」の形式による神のことはへの本来の奉仕も考慮しなければなりません。この「カテキズム」は、あらゆるカテキズムの核心である、最初の信条から始まり、各時代におけるさまざまなものがあります。普遍教会における最新のものは『カトリック教会のカテキズム』と、それぞれの地方教会で書かれたカテキズムです。

#### 靈感を受けた神のことはである聖書

15 「聖書は、聖霊の靈感によって書かれたものとしての神のことはである」(46)。聖書は「(聖なる) 書物」(Scriptura [sacra]) と「聖書」(Biblia 巻物) という名で呼ばれます。この二つの呼び名はそれ自体として意味深い呼び名です。なぜならそれは優れた意味での「テキスト」また「書物」を表すからです。この名称は教会外でも広く用いられます。

根本的に考えると、聖書を読む際に次のことを考慮しなければなりません。すでに神学的な枠組みとして述べられた通り、聖書と聖伝は変わることなく神のことはを伝え、「聖霊の声」(47) を反響させています。靈感のたまもの意味。聖霊はこの靈感によって聖書を神のことはとし、またそれを教会にゆだねます。教会は信仰の従順によって聖書を受け入れます。聖書解釈の基準としての正典の一致。聖書の真理。この真理は、何よりも「神がわれわれの救いのために書かれることを望んだ真理」(48) として理解しなければなりません。人間のことはで書かれた神のことはとしての聖書の意味と内容。この人間のことはにおいて、聖書解釈は、信仰の導きのもとに、哲学的・神学的基準と結びつけられます。教皇庁聖書委員会が『教会における聖書の解釈』(49) で確認している通りです。

今日、神の民はますます神のことはに飢え渴いています(アモス 8・11 - 12 参照)。この強い欲求を見過ごしてはなりません。なぜなら、主ご自身がこの欲求を促しておられるからです。同時に、残念なことに、この欲求はかならずしもどこでも感じられているわけではありません。それは神のことはに触れることがあまりなかったり、適切にしかたで聖書を読むことがないためです。聖書とは何か、聖書はなぜ存在するか、聖書は信仰にとってどれほど役に立つか、聖書をどう用いればよ



いかを信者が知ることができるように助けることが強く求められています。この必要に、教会はこたえてきましたし、特に『啓示憲章』の4つの章(50)でこたえています。これらの章を、他の教導職の教えと専門家の研究と結びつけながら、適切なしかたで知ることが、わたしたち教会共同体の責務です。

#### 緊急に必要な課題 教会の中で神のことばを解釈する

16 教会に属する多くの人が、個人やグループで、聖書に書かれた神のことばを熱心に研究しています。このことは、信者が聖書を正しく理解し、聖書を日常生活に適用できるようにするための貴重な機会を教会に与えます。ある意味でこれは現代、特にいえることです。なぜなら、聖書を読むことは、特に哲学・科学・歴史研究において、神のことばと人文科学の間の生き生きとした出会いをもたらしうるからです。このみことばと文化の出会いによって、人びとは神と人間と事物に関する真理と価値を知ることができるようになります。この出会いはまた新たな諸問題に継続して取り組むことを可能にします。こうして理性は信仰を求めます。その結果、人びとは神の啓示と人類への期待に従って、真理といのちのために協力して働くようになります(51)。

同時に、聖書が恣意的ないし文字通りの意味で解釈される危険もあります。原理主義に見られる通りです。こうした解釈はテキストに忠実であろうとする望みを示すとともに、テキストのあり方に関する誤解を示しています。そこから、こうした解釈は深刻な誤りに陥り、また不毛な論争を引き起こします(52)。聖書を読む際のもう一つの危険は、聖書の「イデオロギー的な」読み方、ないし、聖書を信仰と切り離してたんなる人間のことばとして読む読み方から生まれます(二ペトロ1・19-20、3・16参照)。そこから、聖書に関する見解の対立ないし分裂が生じます。聖書はみことばを力強く宣べ伝え、信者の生活の源泉となるものです。聖書の不適切な読み方が、教導職の役割をあいまいにすることもあります。教導職は、聖書と聖伝の両方の意味での神のことばに奉仕するのです。一般に、みことばに関する解釈学の役割についての知識の不足ないし不正確さが見られます。みことばの解釈学は、教会の聖伝とのつながりと教導職への従順のもとに、人間的手段と啓示された手段とから基準を引き出さなければなりません。

今日では、第二バチカン公会議とそれに続く教導職の文書(53)に基づいて、他の側面も注目しなければなりません。それは、みことばが教会の司牧活動の中で適切なしかたで伝えられるためです。わたしたちは神と人間の書である聖書を、歴史的かつ文字通りの意味と神学的かつ霊的な意味とを正しく組み合わせるべきであり、また歴史的・批判的方法は他のさまざまな方法によって補われなければなりません(55)。これが聖書解釈の基盤です。しかし、完全で全体的な意味に到達するために、『啓示憲章』に述べられた神学的基準を用いる必要があります。すなわち、「聖書全体の内容と一体性……、教会の生きた聖伝全体……、信仰の類比」(56)です。現代、教会共同体を造り上げるために、徹底した神学的・司牧的考察が必要とされています。教会共同体は、神のことばとしての聖書に関する適切かつ実り豊かな知識に基づいて築かれなければなりません。神のことばは、教会の中に生きておられる、イエス・キリストの十字架と復活の神秘の内に含まれます。

教皇ベネディクト十六世はいいます。「わたしは、神学者が、公会議が望んだしかたで、『啓示憲章』に従って、聖書を解釈し、愛することを望みます。神学者が聖書の内的な一致を体験することができますように。そのために現代では『規範的な釈義』が役立ちます(もちろんこれはまだ始まったばかりにすぎません)。そして、次に聖書の霊的解釈を行うことができますように。この聖書の霊的解釈は、外面的に敬虔になることではなく、内面からみことばの前に進み出すことです。この点において何かを行うこと、すなわち、歴史的・批判的釈義と並んで、この釈義とともに、またこの釈義の内に、現代の神のことばとしての生きた聖書への導入を行うことは、きわめて重大な課題だと思われまゝ」(57)。

このことについて、『カトリック教会のカテキズム』や、聖書が神の民の中に生み出したさまざまな声や伝統、そして神学や人文科学の研究の貢献に注意を払う必要があります。

これに関連して、教会が聖なる秘跡を共に祝うたびごとに行う、神のことばの解釈のことも考慮すべきです。感謝の祭儀で朗読される朗読聖書の『緒言』はこのテーマについて次のように述べます。「キリスト自身の意志により、新しい神の民はすばらしい多様性をもつメンバーから成り立っているため、神のことばに関して各自に与えられている務めと役割も異なっている。信者は神のことばを聞いて黙想するが、神のことばを公式にのべることは、聖なる叙階によって教導の役割を与えられた者、または同じ役務を果たすよう委任された者だけがこれを行うのである。このように、教えと生活と礼拝の中に、教会は自らのすべてと信じるすべてのことを永続させ、あらゆる世代に伝えていく。こうして、時代の推移に伴い、教会における神のことばの実現を目指して、神の真理の満ち満ちた状態に達しようと絶えず努めるのである」(58)。

## 旧約と新約 唯一の救いの営み

17 さまざまな理由で、多くの人びとの聖書に関する知識とその扱いはかならずしも十分なものではありません。難解に見える旧約の箇所を取り上げるのを躊躇することがあります。そこから、ある箇所の朗読を脇に置いたり、恣意的に選んだり、拒絶したりする危険が生じます。教会の信仰は、旧約をキリスト教の聖書の一部と考え、旧約がもつ不変の価値と、旧約と新約の間の絆を認めます(59)。それゆえ「旧約のキリスト教的な読み方」を中心に置く教育が緊急に求められています。そのために典礼の実践が役立ちます。典礼は常に、旧約朗読を新約の完全な理解のために不可欠なものとしてきたからです。イエスご自身がこのことをエマオの記事の中で確認しておられます。師である方は「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを説明された」(ルカ 24・27)のです。典礼における旧約朗読は、聖書本文を完全かつ詳細に読むための貴重な手段として役立ちます。典礼では、答唱詩編が、朗読された箇所についての祈りと黙想へと招きます。そして、第一朗読と福音のテーマが関連づけられます。このテーマをまとめるのは、キリストの神秘に基づく計画です。まことに、「新約は旧約の中に隠れ、旧約は新約の中で明らかにされる (Novum in Vetere latet et in Novo Vetus patet)」(60)のです。

大聖グレゴリオはいいいます。「旧約の約束は新約において現れます。かつて隠されたしかたで告げられたことが、今や公に告げ知らされます。それゆえ旧約は新約の預言であり、新約は旧約の説明なのです」(61)。

現代、新約はある意味で聖書朗読の中で親しまれています。朗読聖書や聖務日課の祈りに収められたさまざまなテキストは、福音に中心的な価値を置きます。福音は、3年周期の主日・祝祭日用朗読配分と、1年周期の週日用朗読配分の中で全体が読まれます。朗読聖書は聖パウロと他の使徒の偉大な教えも重視しています(62)。

## 第1章についての質問

### 1. 救いの歴史における神のことばに関する知識

啓示、神のことば、聖書、聖伝、教導職に関して、信者(小教区、修道会、運動団体)はどのように考えていますか。信者は神のことばのさまざまな意味の違いを理解していますか。イエス・キリストが神のことばの中心であることを理解していますか。神のことばと聖書はどのような関係にありますか。理解が難しいことは何ですか。その理由は何ですか。

### 2. 神のことばと教会

神のことばに近づくこと このことが、どのようにして、キリストのからだである教会に属す

ることに関する認識を深め、教会の宣教への心からの参加を促しますか。神のことばと教会に関して、信者はどのように理解していますか。釈義と神学研究において、また信者が聖書に触れるとき、聖書と聖伝は適切に関係づけられていますか。信仰教育（カテケージス）は神のことばに基づいてなされていますか。聖書は十分に重視されていますか。神のことばの宣教における教導職の重要性和責務は認識されていますか。信仰に基づいて、真の意味で神のことばに耳を傾けていますか。明確にすべき点、強調すべき点は何ですか。

### 3．神のことばにおける教会の信仰のさまざまなしるし

『啓示憲章』はどの程度受け入れられていますか。『カトリック教会のカテキズム』はどの程度受け入れられていますか。神のことばの使徒職において司教がもつ教導職としての特別な役割は何ですか。みことばの宣教において、叙階された奉仕者、司祭、助祭の果たす職務は何ですか（『教会憲章』25、28 参照）。信者は神のことばと奉献生活の関係をどう理解していますか。将来の司祭の養成において神のことばをどのように用いることができますか。神の民（司祭、助祭、奉献生活者、信徒）の中で、神のことばに関するどのような教育が必要とされていますか。

### 4．神のことばとしての聖書

なぜ現代のキリスト信者は熱心に聖書を探究するのでしょうか。聖書は信仰生活にどのような影響を及ぼしますか。非キリスト者の中で聖書はどのように受け入れられていますか。知識人の中で聖書はどのように受け入れられていますか。聖書は常に正しく扱われていますか。広く見られる問題は何ですか。靈感のたまものと聖書の真理に関して、信者はどう理解していますか。信者は、聖書の霊的な意味が、神の意図した最終的な意味であることを理解していますか。旧約はどのように受け入れられていますか。福音のほうがよく読まれる場合、福音に関する知識と読み方は十分なものです。現代、多くの人が「難しい」と考える聖書の箇所はどこですか。この問題にどう対応すればよいのでしょうか。

### 5．神のことばへの信仰

信者は神のことばをどうとらえていますか。信者は深い信仰をもって神のことばに耳を傾け、神のことばによって信仰を新たにしようとしていますか。信者は何のために聖書を読んでいますか。信者は聖書を読むときに、どのような識別基準を用いていますか。

### 6．マリアと神のことば

なぜマリアは神のことばを聞くための模範また母なのですか。人びとは神のことばを、マリアがなされたように受け入れ、生きていますか。どうすればマリアは信者にとって、神のことばを聞き、黙想し、生きるための模範となることができるのでしょうか。

## 第2章 教会生活における神のことば

「そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命をかならず果たす」(イザヤ 55・11)

教会は神のことばによって生まれ、神のことばによって生きる

18 教会は、自らが常に神のことばによって招かれ、新たにされていると告白します。教会はこのことを愛と力をもって宣べながら、まず神のことばを「うやうやしく聞きます」。そして、内的な驚きにとらえられながら、謙虚で信頼に満ちた信仰をもって神のことばを受け入れます(63)。その模範はマリアです。マリアはみことばを聞いて、それを行いました(ルカ 1・38 参照)。だから主はマリアを教会の模範としたのです。

教会共同体も同じように聖書に近づきます。「実際、聖書において、天にまします父は、深い愛情をもって、常に自分の子どもたちと会って、互いに語り合うのである」(64)。それゆえ聖書は、教会の心と手の中にゆだねられます。聖書は、「全能の神から人類に送られた手紙」(65)、いのちの書、わたしたちがキリストのからだに示すように最高の尊敬を示す対象だからです(66)。教会共同体は聖書の内に、教会、人類、そして全被造物に対する神の計画を見いだします。それゆえ「教会は、今日も、今までと同じように、聖伝と共に聖書をおのが信仰の最高の規範と考えている」。そして、聖書を力強く宣べ伝え、「魂の糧、霊的生命の泉」(67)としてこれに近づきます。

キリスト信者は教会から聖書を受け取ります。キリスト信者は教会と共に聖書を読み、教会と共に考え、教会と共に望みます。こうしてキリスト信者は、あらゆるみことばとの出会いが目指す究極の目標を目指します。すなわち、キリストが教えたように、信仰、希望、愛の生活の中で神のみ旨を行うことによって、師である方に従うことです(ルカ 8・19 - 21 参照)。

神のことばは歴史を通して教会を支える

19 神の民は常にみことばから力を汲み取ります。このことは、預言者が神の民に語り、イエスが群衆や弟子に教え、使徒が初代教会に語りかけたときから、今に至るまで見られます。それゆえ、特に聖書に書かれたみことばの存在が、各時代の聖書学と教会の歴史をどのように特徴づけてきたかを注意深く調べなければなりません。

教父の時代、聖書は、神学、霊性、そして司牧生活の中心であり源泉でした。教父は聖書の「霊的な」読み方と呼ばれるものの比類のない教師です。この「霊的な」読み方は、忠実に行うならば、「文字」すなわち具体的かつ歴史的な意味を破壊しません。かえって、霊において「文字」を読むことを可能にします。中世においても、聖書は神学的考察の基盤でした。中世の学者は聖書の4つの意味を区別しました(文字の意味、寓意的意味、道徳的意味、上昇的意味)(68)。古くからある「霊的読書(レクチオ・ディヴィナ)」の伝統は修道院的な祈りの形式です。「霊的読書」は芸術的な靈感の源泉となり、さまざまな形の説教や民間信心を通じて信者に伝えられました(69)。現代では、分析的な精神の高まり、科学の進歩、キリスト者の分裂、そこから生じるエキュメニズムの責務が、困難と論争を伴いながらも、より適切な方法論と、聖伝の中で深められた聖書の神秘の理解をもたらしています。現在、教会は、第二バチカン公会議に基づいて、みことばの中心性に基づく刷新を経験しています。

歴史的な多様性ととも、地理的な多様性も存在するといえます。神のことばは聖書の中に存在し続けるので、それは五大陸の部分教会への福音宣教のわざによって広がります。みことばのインカルチュレーションが部分教会の中で行われることによって、みことばは、多くの民族の信仰を活気づける源泉、教会の交わりの基盤、みことばの神秘の汲み尽くしえない豊かさのあかし、文化と

社会に靈感を与え、それを変容させるのための永遠の源となります。

聖霊の祈りの力によって、神のことは教会生活のあらゆる側面に行き渡り、それらを生かす  
20 聖霊は教会を導いて真理をことごとく悟らせませす(ヨハネ 16・13 参照)。こうして聖霊は教会に神のことはの真の意味を理解させ、ついにはみことばが啓示された偉大な瞬間そのものへと教会を導きます。すなわち、御父の啓示である、ナザレのイエス、神の御子です。聖霊は聖書の魂であり、その解釈者です。聖書は聖霊の靈感のもとに書かれたからです。それゆえ聖書は「それが書かれたのと同じ霊の光のもとに読まれ、解釈されなければならない」(70)のです。教会は聖霊に導かれながら「聖書をますます深く理解するよう努力」します。それは、おのが子どもたちを養うためです。その際、教会は、特別な意味で東方教会と西方教会の教父の研究や(71)、釈義的・神学的研究、また聖人の生涯と信仰のあかしからも学びます。

このことに関連して、『朗読聖書の緒言』は次のように述べます。「人の耳に響く神のことは心の中に効果を上げるには、聖霊の働きかけが必要である。聖霊の息吹と助けによって、神のことは典礼行為の基礎となり、また生活全体の規範と支えになる。したがって、聖霊の働きは、あらゆる典礼行為に先立ち、それに伴い、その後が続くばかりでなく、神のことはの宣言において信者の集会全体に向かって告げられるすべてのことを、一人ひとりの心に思い起こさせ(ヨハネ 14・15 - 17、25 - 26、15・26 - 16・15 参照)、皆の一致を固めると同時に、たまもの多様性を促進し、その種々の働きを高揚するのである」(72)。

ですから、キリスト教共同体は、聖霊の働きによって日々築き上げられます。すなわち共同体は、神のことはに導かれ、照らしと回心と慰めのたまものを受けます。聖霊がこのたまものをみことばを通じて与えるからです。「かつて書かれたことがらは、すべてわたしたちを教え導くためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望をもち続けることができるのです」(ローマ 15・4)。

教会の第一の務めは、信者が、聖霊の導きのもとに神のことはと出会うとはどういうことであるかを理解できるように助けることです。特に教会が教えなければならないのは、次のことです。このような出会いがどのようにして聖書の霊的な読み方によって生じるのか。聖書と聖伝と教導職は聖霊によってどのように内的な意味で結び合わされているか。そして、洗礼や他の秘跡の中で与えられる聖霊に導かれるために、信者は何をしなければならないかということです。ダマスコの聖ペトロスはいいます。「聖書の霊的な意味を味わった人は、聖書のもっとも単純なことはの意味ともっとも深遠なことはの意味は一つであることを知っています。これらの二つの意味は共に人間の救いを目指しているからです」(73)。

教会はさまざまなしかたでみことばによって養われる

21 「教会の説教は、キリスト教そのものと同じように、聖書によって養われ、導かれる必要がある」(74)。聖パウロは祈り求めます。「主のことはが、……速やかに宣べ伝えられ、あがめられるように」(一テサロニケ 3・1)。この願いはさまざまなしかたで、すなわち教会生活のさまざまな場で実現されます。そのために必要なのは、熱心な信仰、使徒としての献身、思慮深い司牧的配慮です。この司牧的配慮は、継続的、創造的に、また、さまざまな経験の共有によって豊かにされながら行われなければなりません。現代のあらゆる教会共同体に求められているのは、聖書を基盤とした司牧的生活、いいかえれば、聖書から絶えず靈感を受けながら行われる司牧的生活です。

こうした一致と協力という観点において、教会は、神のことはとの出会いがもつ生き生きとした性格を知る必要があります。このような出会いが教会の司牧活動の源泉です。わたしたちが告げ知らせ、耳を傾けるみことばは、典礼と教会の秘跡的生活の中で祝われることを求めます。こうして神のことは、教会の交わりと愛と宣教の経験を通して、教会生活の基盤となります(75)。

## a 典礼と祈り

22 「典礼において、儀式とことばが密接に結ばれていることを明らかにするために」(76)。教会は、個人的また共同の祈りだけでなく、典礼の祈りの中で独自のしかたで語られる神を見いだし、迎え入れることを学んできました。実際、聖書は典礼や預言のことばです。聖霊は聖書の中で、書かれた文字を超えて、実際に世において行われたキリストの出来事を宣べ、あかしします。典礼が聖書の知識や聖書への愛を深めることを知っている教会は、典礼におけるみことばの使用に関する第二バチカン公会議の文字と精神を実践し続けなければなりません。それは質的な意味でも量的な意味でも、活発な刷新が行われることを求めます。信者も公会議のさまざまな指針を共に考察することが求められます。

このことに関連して、次のことを考慮することが不可欠です。すなわち、「キリストはご自身のみことばの内に現存しておられる。それは、聖書が教会で読まれるときは、キリスト自身が語られるからである」ということです(77)。それゆえ、「典礼行事にとって、聖書はもっとも重要なものである」(78)。そこで、典礼行為においてみことばと出会うあらゆる時に特別な注意を払う必要があります。すなわち、感謝の祭儀(主日)、さまざまな秘跡、説教、典礼暦年、聖務日課、準秘跡、さまざまな民間信心と秘義教話です。

第一の座を占めるのは、特に主日にささげられる感謝の祭儀です。感謝の祭儀は本来「神のことばの食卓とキリストのからだの食卓」(79)とから成る一つの食卓です。「感謝の祭儀は、交わりが絶えず告知知らされ、養われるための、特別な場です」(80)。多くのキリスト信者にとって、神のことばと出会う主な機会である主日のミサは、現代でも依然としてみことばに触れるかけがえのない時です。したがって、主日の感謝の祭儀の中で、みことばを記念し、心から喜びをもってみことばと出会うことができるために、真の意味での司牧的熱意をもたなければなりません。

具体的にいえば、ことばの典礼に最大限の注意を払う必要があります。ことばの典礼は、感謝の祭儀の中だけでなく、他の秘跡の中でも行われます。そのために、テキストをはっきりと、よく聞こえるように読まなければなりません。同じことは説教にもいえます。説教は、はっきりとみことばを語って人びとを力づけ、信仰の光のもとに、聖書に語られた生涯と歴史の出来事を解釈しなければなりません。これらのことはすべて信者の祈りに支えられながら行われます。信者の祈りは、それ自体として、今ここで語られる神に対する賛美と感謝と祈願となります。このことに関連して、『ミサの朗読配分』(81)と聖務日課の祈りに、特別な注意を払う必要があります。

現代の教会は、司牧活動を通じ、どうすれば信者が神のことばと出会うこれらの重要な機会にもっとあずかれるようにできるかを考えるよう、何よりも求められています。

## b 福音宣教と信仰教育

23 「ことばの奉仕、すなわち、司牧的説教、信仰教育、各種のキリスト教教育」この中で典礼中の説教は特別な地位を占めるべきであるが「これらは、聖書のことばによって、健全な栄養と聖なる活力を与えられる」(82)。教皇ヨハネ・パウロ二世はいいます。「福音宣教や信仰教育のわざは、神のことばに注意深く耳を傾けることにより活気づけられます」(83)。これが、第二バチカン公会議の最大のはっきりと目に見える成果です。この成果を継続、拡大し、その質を高め、確信をもって奨励し、支持しなければなりません。教会は、自らの最大の宝として神のことばのたまものを受け取りながら、神のことばを最大の務めとしていることを知っています。すなわち、みことばを他の人びとに告げるといふ務めです(84)。たとえばここでは、キリスト教入信の準備やキリスト信者の継続教育のために、典礼暦の中で最初に行われるみことばの告知や信仰教育のような、み

ことばへの奉仕の機会を挙げることができます(85)。

そのため、『カテゲジス一般指針』やさまざまな地方教会の「信仰教育指針」の内容に従って、みことばを伝えるさまざまな方法と、時代の違いや霊的・文化的・社会的状況に応じて変化する信者の必要とを考慮する必要があります(86)。神のことばの光のもとに民間信心を適切に照らし、浄め、評価することにも注意を払うべきです。民間信心はしばしば神のことばから生じるからです。このことに関連して、教会の中にすでに存在するもの、またこれまでに述べたものを含む、みことばを伝えるさまざまな手段に注意を向けなければなりません。すなわち、朗読聖書、聖務日課、信仰教育、みことばの祭儀などです。

聖書に直接接触することは、福音宣教において重要な役割を果たします。実際、福音宣教が第一に目指すのは聖書です。「具体的にいえば、信仰教育は『真の意味での「霊的読書(レクチオ・ディヴィナ)」、すなわち、教会に住まわれる聖霊に従って聖書を読むことへの導入』とならなければなりません」(87)。同時に、福音宣教の本質的な内容も聖書です。信仰教育は「常に聖書に触れることによって、聖書と福音の思想・精神・態度を吸収し、それらに満たされなければなりません」(88)。

学校の中で、特に宗教教育の中で聖書を教えることには、特別な文化的な価値があります。

『カトリック教会のカテキズム』は、教会の交わりのための有効かつ正統な手段として、また、信仰教育の確かな規範として、特別な役割を果たします(89)。「カトリック教会のカテキズム」は聖書に基づく信仰教育の代わりとなることを意図するのではなく、教会に関する完全な見方をまとめることを目指しています。

神のことばは、識字能力のない人も含めた、すべての人に伝えられます。したがって、現代のさまざまなマス・メディアの手段が特に役立ちます。神のことばの奉仕職が成果を上げるためには、マス・メディアのさまざまな手段を適切に更新しつつ、創造的に用いることが必要です。

文化と社会の大きな変化から信仰教育に求められていることがあります。それは、人びとが、歴史、科学、道徳的問題などのテーマに関する聖書の「困難な」箇所を説明できるように助けることであり、また、神、人間、道徳的行為に関する旧約の思想の諸問題についての理解を深めることです。

### c 釈義と神学

24 「したがって、聖書研究はあたかも神学の魂のようなものでなければならない」(90)。この釈義と神学の分野における第二バチカン公会議以後の成果について、主が与えてくださった真理の霊のたまものをたたえずにはられません。さらに、神のことばはわたしたちのただ中に住まわれるがゆえに(ヨハネ 1・14 参照)、同じ霊に駆り立てられて、わたしたちは、みことばが現代人の中で働く新たな形を識別し、みことばに関する人類の期待と挑戦を考察しようと努めます。

今日、これまでほとんど表明されなかったような形で、さまざまな重要な考えが示されています。それは次のようなものです。 教会の考え方に従って聖書を研究し、説明するという、釈義学者と神学者の課題。 教会の生きた聖伝との関連で聖書のことばを解釈し、教えること。また、聖書のことばとの関連で教会の生きた聖伝を解釈し、教えること。 釈義と神学における教父の遺産を重視すること。 教会の教導職の教えの導きに従うこと。 忠実かつ知性をもって釈義と神学の課題を遂行すること(91)。

この点について、『司祭の養成に関する教令』が司祭養成における神学教育とその方法に関して当時述べたことを思い起こすのは有益です。そこで述べられた大部分のことは今なお今後の実施課題となっています。『司祭の養成に関する教令』に示された方針を実行することが必要です。すなわち、まず神学課程の基準として聖書の主題から出発します。聖書の主題の研究と教育は、司祭職に関する教理の適切な要約を示し、神の民に関する考察の源泉として役立ちます。公会議の指針に立ち戻

ることによって、神のことばそのものを豊かにできます。神のことばは神学の諸学科の教えの中で、また「諸文化に耳を傾けること ( *auditus culturae* )」に基づく対話の継続の中で、実現するからです ( 92 )。

神の啓示と、現代人の生活とものの考え方との関係にも注意を向けなければなりません。それには次のような課題があります。 神のことばを用いて最近の人間学の諸思潮を考察すること。

「人間の靈魂が真理の観想へと飛翔していく両翼のようなもの」( 93 )である理性と信仰の関係、また、神に由来する唯一の真理を伝える手段を研究すること。 偉大な諸宗教と対話しながら、神の名においてより公正で平和な世界を築くこと。

キリスト教共同体は、聖書学者が、「適切な支援」を与えられながら、神のことばの奉仕者を熱心に助けてくれることを心から望みます。それは、神のことばの奉仕者が「精神を照らし、意志を強め、人の心を神への愛に燃え立たせるような聖書の糧を神の民に与えようようにする」( 94 ) ためです。

#### d 信者の生活

25 「聖書を知らないことは、キリストを知らないことである」( 95 )。「このゆえに、すべての聖職者 ( と信徒 ) は、絶えず聖書を読みまた熱心に研究しなければならない」( 96 )。

聖書に基づく信仰教育が進展するにつれて、聖書の靈的な意味は、神の民の生活における神のことばの中で、もっとも魅力的で将来性のあることがらとなっています。キリスト信者の最高の召命は、みことばと出会い、みことばを祈り、みことばを生きることです。教皇ヨハネ・パウロ二世がいう通り、「個人や共同体が、今や幅広く聖書に親しんでいます」( 97 )。しかしながら、聖書に親しむ人の数はもっと多くならなければなりません。また、みことばへの近づき方も、教会への奉仕という、みことばの最終目標に沿ったものでなければなりません。真の意味でのみことばの靈性に必要なのは次のことです。すなわち、「聖書を読むにあたっては、神と人間との会話ができるよう、それに祈りを加えることを忘れてはならない。実際、われわれは祈る場合には、神に話しかけ、神のことばを読む場合には、神の話を聞くのである」( 98 )。聖アウグスチヌスはいいます。「あなたの祈りは神に向けて語ったことばです。あなたが聖書を読むとき、あなたに語りかけるのは神です。あなたが祈るとき、あなたは神に語りかけるのです」( 99 )。そこから、第一に優先しなければならないことが生じます。

まずわたしたちは、神のことばを、内的な意味でも外的な意味でも、「貧しい心」で受け止めなければなりません。それは神のことばに完全な意味でこたえるためです。「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためです」(二コリント 8・9)。それゆえ、わたしたちは、イエスが御父のことばを聞き、それをわたしたちに告げ知らせたのと同じしかたに基づいて、神のことばを聞かなければなりません。すなわち、あらゆるものを完全に捨てて、貧しい人に福音を告げ知らせる用意ができていなければなりません ( ルカ 4・18 参照 )。「無力な人々、貧しい人々が聖書を手にするのを見て喜ぶことができる。その彼らは、靈的で実存的な観点から確かな聖書学そのものからの光よりもいっそう突っ込んだ光を聖書の解釈と現在化にもたらしてくれるかもしれない」( 100 )。

何よりも、教会は、伝統的に「靈的読書 ( *レクチオ・ディヴィナ* )」と呼ばれた聖書の読み方を奨励しなければなりません。「靈的読書 ( *レクチオ・ディヴィナ* )」は4つの段階 ( 読書、黙想、祈り、観想 ) から成ります。この実践は、教会の初期の時代にさかのぼり、教会の歴史全体に見られます ( 101 )。この祈りの伝統は修道院に由来しますが、現代、聖霊は、教会の教導職を通じて、それが聖職者 ( 102 )、小教区共同体、運動団体、家庭、そして青年の中で行われることを促しています ( 103 )。



教皇ヨハネ・パウロ二世はいいいます。「みことばに聴くことが、昔から今日に至るまで有効な伝統であるレクチオ・ディヴィナ（霊的読書）の中で、神との生き生きとした出会いとならなければなりません。レクチオ・ディヴィナは、わたしたちの生活を問い、方向づけ、それにいのちを与える生きたことばを、聖書の本文の中に読み取らせませす」（104）。「またそのために、新たな方法も用いることができます。その際、新しい方法は、注意深く検討され、時代に合ったものとしなければなりません」（105）。教皇ベネディクト十六世は青年に対して特別に呼びかけます。「わたしは皆さんが聖書に親しむように、強く勧めます。聖書をいつも手に携えてください。それは、聖書が皆さんにとって、行くべき道を指し示す羅針盤となるためです」（106）。ベネディクト十六世はすべての人のためにいいいます。「祈りとともに聖書を熱心に読むことにより、内的な対話が生まれます。この対話の中で、聖書を読む人は神が語ることばを聞きます。また、その人は、祈りのうちに、開かれた信頼の心をもって、神にこたえます」（107）。

神の民全体の中で「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」が行われるようになったのは比較的最近のことです。それゆえ、司祭、奉献生活者、信徒に対して、忍耐強く啓発的な継続教育を行うことが必要です。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」の実践は、わたしたちが聞いた神のことばそのものから生じる、神体験の共有（collatio）にまでなるはず（108）。神のことばは、教会共同体の霊的生活のさまざまな実践に靈感を与える第一の源泉とならなければなりません。たとえば、霊操や黙想、さまざまな信心と信心業です。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」の実践の重要な目標（またそれが真の実践であるかどうかを示す基準）は次のことです。すなわち、人が知恵をもってみことばを個人的に読めるように成長すること。つまり、キリスト信者が実生活を識別し、そこから「希望についての説明」（一ペトロ 3・15 参照）ができるようになることです。これがキリスト信者の聖性のあかしの基本だからです。

聖チプリアノは、教父の思想と一致しながらいいいます。「あなたは時には熱心に祈り、時には読書をするようにしてください。神と語るその時こそ、神があなたと共におられます」（109）。

「あなたのみことばは、わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯」（詩編 119・105）。いのちを愛する主は、どんなときにも、みことばが信者の生活のすべてを照らし、導き、慰めることを望まれます。労働のときも、休みのときも。苦しみのときも、家族や社会への責務を果たすときも。喜びのときも、悲しみのときも。こうしてすべての人がおのの置かれた状況の中で、善いものを大事にすること（一テサロニケ 5・21 参照）を見分け、また、神のみ旨を知って、それを行うことができるようになるのです（マタイ 7・21 参照）。

## 第2章についての質問

### 1．教会生活における神のことば

自分の教会共同体また信者の中で、神のことばはどの程度重視されていますか。どのような意味で神のことばはキリスト信者を養う糧となっていますか。キリスト教が「書物の上だけの宗教」に陥る危険はありますか。個人の生活の中で、また主日の信者の集いの中で、神のことばは敬われ、よく読まれていますか。週日に神のことばは敬われ、よく読まれていますか。典礼暦の特別な季節に神のことばは敬われ、よく読まれていますか。

### 2．神の民の教育における神のことば

自分の共同体や信者一人ひとりに対して、神のことばに関する教えを包括的かつ全体的に伝えるためにどのようなことが行われていますか。養成中の司祭、奉献生活者、共同体の奉仕者（カテキスタなど）は、それぞれの司牧的奉仕職における聖書の扱いについて適切な養成や、定期的な継続養成を受けていますか。信徒のための継続的な養成コースはありますか。

### 3．神のことば、典礼、祈り

信者は典礼と個人の祈りの中でどのように聖書に接していますか。信者はことばの典礼と感謝の典礼の関係をどのように理解していますか。感謝の祭儀で記念されるみことばと、キリスト信者の日常生活の関係をどのように理解していますか。神のことばは説教の中に真の意味で反映していますか。なすべき課題はどのようなものですか。ゆるしの秘跡の中で、神のことばを聞くことも同時に行われていますか。聖務日課の中で、神のことばを聞くこと、また神のことばとの対話は行われていますか。神のことばを聞き、それと対話することは、信徒の中でも行われていますか。神の民は聖書に触れる十分な機会をもっていますか。

### 4．神のことば、福音宣教、信仰教育

第二バチカン公会議と教会の教導職の教えから見て、神のことばと信仰教育に関する積極的な側面と消極的な側面はどのようなものですか。信仰教育（キリスト教入信と継続養成）のさまざまな形の中で神のことばはどのように扱われていますか。教会共同体は、聖書に書かれた神のことばに十分な注意を払い、その研究を行っていますか。行っている場合、どのように行っていますか。さまざまな人（子ども、青少年、青年、成人）に対して、どのように聖書に関する入門教育が行われていますか。聖書に関するどのような入門講座が行われていますか。

### 5．神のことば、釈義、神学

神のことばは釈義と神学の魂となっていますか。「啓示されたみことば」としての性格は十分理解され、尊重されていますか。聖書に関する学問的研究は、適切な信仰の基盤によって促され、支えられていますか。聖書本文を扱う際の通常の方法はどのようなものですか。神学研究の中で聖書はどのような役割を果たしていますか。共同体の司牧的生活の中で聖書は十分考慮されていますか。

### 6．神のことばと信者の生活

神の民の霊的生活に聖書はどのような影響を与えていますか。聖職者の霊的生活に聖書はどのような影響を与えていますか。信徒の霊的生活に聖書はどのような影響を与えていますか。マリアの貧しく信頼に満ちた態度は「マリアの賛歌」の中に明らかに示されていますか。なぜ物質的な豊かさが神のことばを熱心に聞くための妨げとなるのですか。感謝の祭儀や他の典礼の中で、神のことばは信仰を伝えるための強力な手段となっていますか。あるいはなっていませんか。さまざまなキリスト信者が聖書に無関心だったり、積極的な関心をもたないのはなぜですか。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」は行われていますか。それはどのような形で行われていますか。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」を推進する要因、あるいは妨げる要因はどのようなものですか。

### 第3章 教会の宣教における神のことば

「イエスはお育ちになったナザレに来て、いつもの通り安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目にとまった。『主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである』。イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。そこでイエスは、『この聖書のことばは、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した』と話し始められた」(ルカ 4・16 - 21)。

教会の使命は、人となった神のことば、キリストを宣べ伝えることである

26 「福音宣教の務めの中で『みことばの奉仕者』であるために、まず自分がみことばに養われること。これが教会にとって、新しい千年期の初めの優先課題であることは間違いありません」(110)。そのために必要なのは、師である方の学びやに行き、みことばが神の国の宣教の中心であることを学ぶことです(マルコ 1・14 - 15 参照)。この宣教はことばと行いをもって、すなわち教えと生活のあかしをもって行われます。神のことばからもたらされる神の国は、真理と正義、愛と平和の国です。この国はすべての人に与えられます。教会は、みことばを宣べ伝えながら、神の国の建設に参加します。教会は神の国の力を明らかにし、世の救いのためにこの国を示します。神の国の福音は地の果てにまで宣べ伝えられます(マタイ 28・19、マルコ 16・15 参照)。宣教と、宣教のことばを聞くことが、真の信仰の保証です。

「福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです」(一コリント 9・16)。この聖パウロのことばは特に現代において緊急の課題となっています。すべてのキリスト信者は、このことばをたんなる宣言でなく、召命として考えるべきです。すなわち、世のために福音に奉仕するという召命です。イエスはいわれました。「収穫は多い」(マタイ 9・37)。そしてこの収穫はさまざまです。特にアフリカやアジアにおいて、多くの人々は福音を聞いたことがありません。福音を忘れた人もいます。今も福音を聞きたいと願う人もいます。

過去と現在のさまざまな困難によって、主のことばを聞こうとする神の民の旅路がしばしば妨げられています。資金の不足を含むさまざまな理由により、多くの地域では、聖書のテキストや、聖書翻訳とその配布が実際に必要とされています。さまざまなセクトが、聖書の正しい解釈をめぐる特別な問題を引き起こしています。みことばを人びとにもたらすことは大きな課題です。そのためには心から「教会とともに(cum Ecclesia)」考えようとする姿勢が必要です。まず、みことばが聞く人の心を造り変える力を信頼することが必要です。「というのは、神のことばは生きており、力を発揮し、……心の思いや考えを見分けることができるからです」(ヘブライ 4・12)。第二に、現代、確実にまたはっきりと求められているのは、回心、正義、希望、友愛と平和の源泉として、宣言とあかしにおいてみことばを用いることです。第三に、みことばへの奉仕には、大胆な心、勇気、貧しさの精神、謙遜、堅忍と思いやりが必要です。

教皇パウロ六世の使徒的勧告『福音宣教』は、宣教のあり方を教えるものとして、今も現代的な意味をもっています。教皇ベネディクト十六世の回勅『神は愛』も、愛と、神のことばの宣教と、秘跡を祝うこととの間の密接な関係を強調しています(111)。神のことばは愛です。ですから、この神のことばを受け入れたならば、正義と愛のわざを通じて愛を实践することなしに神のことばを宣べ伝えることはできません。回勅『神は愛』は、神のことばに基づく福音宣教に関して、今日特に重要と考えられる目標と課題を要約しています(112)。

聖アウグスチヌスは述べます。「このすべてのことの中で主要なことは、律法と聖書全体の豊かさ  
と目的が、悦び所有すべき神を愛し、その悦ぶべき神をわれわれと共に悦ぶことのできるひとを愛  
することである、と知ることである。ただし人は自己を愛するように命ぜられるには及ばない。だ  
からこの目的を知り、実現できるようになるために、神の摂理によるすべての時間的な配剤がわれ  
われの救いのためになされたのである。……そこで聖書全体をあるいはせめて一部分なりとも自分  
では理解できたと思っている人はだれでも、聖書を理解することによって、その人が神と隣人とに  
対するふたつの愛を建てるどころまでいかなければならない」(113)。

あらゆる時代のすべての人は、神のことばに近づくことができなければならない

27 教会は、使徒の大胆さをもって神のことばを宣べ伝える自由を主張するとともに(使徒言行録  
4・13、28・31)「キリスト信者には、聖書に近づく多くの機会が与えられなければならない」(114)  
と述べます。

教会の宣教においては聖書が必要です。聖書は宣教の基本的な内容を含むからです。教会が強く  
勧めているにもかかわらず、実際には大部分のキリスト信者が個人的に聖書に触れていないことを  
認めなければなりません。聖書に触れている人も、聖書を宣べ伝えるに際して、多くの神学的・方  
法論的な不安を抱えています。聖書が教会との交わりをもつことなく、主観的で恣意的な解釈にゆ  
だねられたり、教会の中の他のことがらと同様に私的な信心の対象におとしめられる危険も存在し  
ます。それゆえ教会は、みことばに関する堅実で信頼できる司牧活動を推進する必要があります。

こうした取り組みから、特別な計画が実践されることになります。たとえば、聖書を司牧計画の  
中で完全な意味で重視しなければなりません。司教の指導のもとで、各教区において聖書を基盤と  
する司牧計画を立てる必要があります。こうした司牧計画は、すでに教会のすばらしい典礼行為の  
中に存在する聖書を用いることができます。そして、特に青年や成人のために「霊的読書(レクチ  
オ・ディヴィナ)」の実践を行うことを通して、聖書と直接触れる機会を与えることが可能です。こ  
うして、神のことばを、司祭と信徒、したがって小教区全体、奉獻生活者の共同体と運動団体の交  
わりの基盤とし、この交わりを通じて示すことが可能になります。

そのために、教区、教会管区、全国レベルでの聖書を中心とした司牧活動は特別な役割を果たし  
ます。聖書を基盤とした司牧計画は、聖書に親しむ実践を広めます(115)。そして信徒の聖書運動  
を推進します。特に青年のための聖書ないし福音の勉強会の指導者を養成します。また聖書に基づ  
く信仰教育講座を提供します。これは、移住者や真理を求める人をも対象としなければなりません。

ここで、1968年以來、教皇パウロ六世が設立した世界カトリック聖書連盟が、神のことばに対す  
る公会議の取り組みを促進することに努めてきたことを指摘するのはふさわしいことです。ほとん  
どすべての司教協議会が世界カトリック聖書連盟の会員となっています。それゆえすべての大陸に  
この組織の支部が存在します。世界カトリック聖書連盟の目的は、聖書をさまざまな言語で提供す  
ること、また、正確な翻訳を通じて、すべての人が聖書を知り、その教えを生きることができ  
るように助けることです。聖書の翻訳は司教の司牧的配慮のもとで行われます。この翻訳聖書が典  
礼で使用されることが適当な場合もあります。教会共同体はまた、聖書を人びとが入手しうる価格で配  
布するよう努めなければなりません。

さらに、神のことばを伝達するために、さまざまな方法と新しい言語形式およびメディアを思慮  
あるしかたで組み合わせ用いなければなりません。たとえば、ラジオ、テレビ、演劇、映画、音  
楽、歌、さらにはCD、DVD、インターネットなどです(116)。

奉獻生活者は、神のことばを伝える上で特別な役割を果たさなければなりません。第二バチカン  
公会議はいいます。奉獻生活者は「神のことばを読み、黙想することによって『イエス・キリス  
トを知ることのあまりのすばらしさ』(フィリピ3・8)を習得するために、何よりもまず聖書を毎日  
手にしなければなりません」(117)。こうして彼らは、特に貧しい人、小さな人、社会から除け者に

された人のための教育と福音宣教という課題を果たすための新たな力を得ます。教父に倣って、奉獻生活者は聖書を日々「思いめぐらす」必要があります。聖アンブロジオがいうように、人が聖書を読み始めると、神は地上の樂園の中をこの人と共に歩みます(118)。教皇ヨハネ・パウロ二世もいいます。「神のことばは、キリスト教のあらゆる霊性の第一の源です。神のことばが、生きている神、そして救い、聖化する神の意志との個人的な関係を育てます。まさにこのことのために、奉獻生活の会の初めの時から、とりわけ隠世修道生活において、神のことばの黙想(レクチオ・ディヴィナ)と呼ばれるものが非常に大切にされてきました。このようにして、神のことばは生活に影響を及ぼし、聖霊のたまものである知恵の光を生活の上に放ちます」(119)。

#### 神のことば キリスト者の一致の恵み

28 教会の司牧活動の主要な目的の一つは、キリスト者の一致です。実際、神のことばと洗礼は、信じる者をキリストと一つに結びつける根本的な要素です。このことに基づいて、エキュメニカル運動は完全な一致に向けた歩みを続ける必要があります。教会の聖伝の光のもとで解釈された神のことばに立ち戻ることだけが、キリストおよび兄弟との完全な出会いを保証することができます(120)。二階の広間で行われたイエスの告別説教は、このような一致が、主が与える御父のみことばを共にあかしすることの内にあることをはっきりと強調します(ヨハネ 17・8 参照)。

それゆえ、神のことばを聞くことがエキュメニカルな側面をもつことを常に考慮しなければなりません。今日、聖書は、諸教会また諸教会共同体の祈りと対話における主な一致点と考えられています。これは大いに喜ぶべきことです。第二バチカン公会議の教えに従って、さまざまな団体が聖書の普及のために協力してエキュメニカルな聖書翻訳を進めています(121)。公会議後、教会の教導職はエキュメニズムの分野で大きな貢献を行ってきました(122)。教導職の文書を注意深く読み、個々の状況に対応しながら、キリスト者の一致に向けた歩みをはっきりと示すしとその促進が期待されています。教皇ベネディクト十六世はいいます。「わたしたちのエキュメニズムの務めにとって、神のことばを聞くことは優先的な課題です。実際、教会の一致をもたらす、築くのは、わたしたちではありません。教会は自分で自分を造るのでもなければ、自分だけで生きるのでもありません。教会は、神の口から出る、造り主であるみことばによって生きています。神のことばを共に聞くこと。聖書の『霊的読書(レクチオ・ディヴィナ)』を行うこと、すなわち、祈りと結びつけて聖書を読むこと。古びることも尽きることもない、神のことばの新しさに驚くこと。わたしたちの偏見や自分の考えに合わないことばに耳をふさぐ傾向に打ち勝つこと。あらゆる時代の信者との交わりの中に聞き、また学ぶこと。これらすべてのことが、信仰の一致を実現するために歩むべき道です。これが、みことばを聞いてそれにこたえることなのです」(123)。

#### 神のことば 諸宗教対話のための光

29 諸宗教対話は教会の歴史を通じて常に行われてきました。しかし、今日それは新たな必要性和これまでになかった課題を帯びています。神学的研究は、諸宗教対話の諸課題を検討し、その司牧的な結果を評価しなければなりません。このテーマに関してこれまで述べられた教会教導職の教え(124)を考慮しながら、次の点を考察し、評価することが必要です。

##### a ユダヤ教徒との対話

30 ユダヤ教徒に対して特別な注意を向けなければなりません。キリストとユダヤ人は、同じ契約に基づく、アブラハムの子です。神は常にご自分の約束に忠実な方なので、最初の契約を無効にされないからです(ローマ 9 - 11 参照)。教皇ヨハネ・パウロ二世はいいます。「この神の民は、天地の造り主である神によって集められ、導かれました。人は文化によって自らの自然な能力を用いま

す。その意味で、この神の民の存在は、たんなる自然的事実でも、文化的事実でもありません。むしろ、この民の存在は超自然的な事実です。この民はあらゆることに耐え忍びました。彼らは契約の民だからです。そして、人間の不忠実にもかかわらず、主はご自分の契約に忠実だからです(125)。ユダヤ人は、キリスト教徒が旧約と呼ぶ、聖書の正典の大部分をキリスト教徒と共有します。そこで、教皇庁聖書委員会の文書『キリスト教徒の聖書におけるユダヤの民とその聖書』(126)は、信仰における旧約聖書と新約聖書の密接な結びつきを考察します。このことは『啓示憲章』でもすでに述べられています(127)。このことに関連して、二つのことを特別に考慮すべきです。すなわち、ユダヤ人の聖書解釈の独自性。そして、反ユダヤ主義のあらゆる形態を退けなければならないということです。

## b 諸宗教対話

31 教会は福音をすべての造られたものにもたらすよう招かれています(マルコ 16・15 参照)。教会はこの使命を果たすために、多くの諸宗教の宗教者と出会います。これらの宗教者も自らの聖典をもち、彼らのしかたで神のことばを理解します。教会は至るところで、「よい知らせ」を積極的に探求する人や、自覚せずただ「よい知らせ」を待ち望む人に出会います。教会には、救いをもたらすみことばをすべての人に宣べ伝える責務があります(ローマ 1・14 参照)。

何よりもまず、わたしたちは、キリスト教が書物の上だけの宗教ではなく、主イエス・キリストに受肉した神のことばに基づく宗教であることを思い起こさなければなりません。諸宗教の聖典との関連で聖書を考察する際には、宗教混交や、表面的な考察や、真理の歪曲に陥らないよう留意しなければなりません。多くのセクトは、教会と関係のない目的や方法のために聖書を用います。ですから、教導職の権威ある解釈に基づいて、神のことばを純粹に保つことに特に注意しなければなりません。

積極的な観点からいうと、諸宗教とその文化を知り、彼らの中にあるみことばの種子を見分けるように努めなければなりません。神のことばを聞くことは、あらゆる形の暴力の排除をもたらすということを知ることが重要です。こうしてみことばは、心でも行いでも、正義と平和を推進させるために働きます(128)。

## 神のことば 現代世界のパン種

32 神のことばとの出会いはさまざまな文化(思想体系、倫理的な原理、人生観など)の中で起こります。これらの諸文化はしばしば経済や科学技術の影響を受け、世俗主義によって導かれ、マス・メディアのさまざまな手段を通じて宣伝されています。こうしたメディアを「世俗的な聖書」と呼ぶこともできます。文化との対話はこれまでもまして緊急を要する課題です。文化との対話は、時としてきわめて骨の折れる仕事ですが、みことばを宣べ伝える上で大きな可能性をもっています。みことばは探求の豊かな源泉です。そして、探求する人に対して、主はこたえを与えて解放をもたらして下さいます。

いいかえれば、神のことばは多元主義的で世俗的な世界の中にパン種として入ります。この世界は芸術、科学、政治、メディアから成る「現代のアレオパゴス」です(使徒言行録 17・22 参照)。こうして神のことばは「文化あるいは諸文化の内に福音の力を持ち込む」(129)のです。それは、これらの文化を浄め、高め、神の国の道具とするためです。

この課題は、「道であり、真理であり、いのちである」(ヨハネ 14・6) イエス・キリストに関するカテケージスを行うことも求めます。このカテケージスを表面的なしかたで行ってはなりません。むしろそれは、人がさまざまな対立する立場と対決できるための適切な準備を与えます。キリストの神秘と、それが人びとの生活にもたらす恵みをはっきりと示さなければなりません。そのために、

聖書が文化と、共通の「生き方(エートス)」に及ぼす、いわゆる「影響作用史(Wirkungsgeschichte)」(訳注1)を研究する必要があります。この諸文化の中で、聖書は、特に西洋において、まさしく「大いなる体系」(訳注2)と呼ばれ、重視されるからです。

### 神のことばと人間の歴史

33 教会は、主に向かって歩む旅路の中で、神のことばがさまざまな出来事や時のしるしの中で読み取られることを知っています。こうした出来事やしるしを通じて、神はご自身を歴史の中で現されるからです。第二パチカン公会議は述べます。「教会は時のしるしを探究して、福音の光のもとにそれを解明する義務を常にもっている。そうすることによって教会は、人生と来世の生命の意味、およびこの両者の相互関係について人間が抱く永久の質問に対して、それぞれの世代に適する方法をもって答えることができる」(130)。教会は、人間の歴史の中にあって、「他の人びとと一緒に自分も参加している現代の出来事、必要、要求の中に、……神の現存または神の計画の真のしるしを見分ける」(131)よう努めなければなりません。こうして教会は人類がいのちと歴史の主と出会うための助けとなるのです。

それゆえ、キリストが神の国の種として植えた神のことばは、人間の歴史を歩みます(二テサロニケ3・1参照)。イエスが栄光の内に再び来られるとき、みことばは神の国の喜びに完全にあずかるようわたしたちを招きます(マタイ25・23参照)。この確かな約束にこたえて、教会は熱い祈りの叫び声を上げるのです。「マラナ・タ」(一コリント16・22)、「主イエスよ、来てください」(黙示録22・20)。

## 第3章についての質問

### 1. 現代世界における神のことばの宣教

司牧的経験からいって、神のことばを聞くことを促す要因、またそれを妨げる要因は何ですか。内面的な不安や、カトリック以外のキリスト教の諸教派からの刺激が信仰の刷新をもたらすことはありますか。世俗主義、この世のさまざまなメッセージからの絶え間ない攻撃、キリスト教の教えに反する生活様式などが神のことばを聞くことを妨げることがありますか。こうした諸問題がある中で、神のことばをどのように宣べ伝えるべきですか。

### 2. 聖書に容易に近づく機会

「キリスト信者には、聖書に近づく多くの機会が与えられなければならない」という『啓示憲章』22のことばはどの程度事実と合致していますか。おおよそのものでよいので、この点に関する統計資料を示してください。個人また共同体全体において聖書のみことばを聞くことは多くなっていますか。

### 3. 聖書の普及

教区共同体における聖書使徒職はどのように行われていますか。教区は司牧計画を立てていますか。司牧計画を実行する人は適切な養成を受けていますか。人びとはカトリック聖書連盟について知っていますか。みことばと出会うためのどのような手段が用いられていますか(聖書研究、みことばによる祈りの会、聖書講座、聖書の日、「霊的読書(レクチオ・ディヴィナ)」)。キリスト信者が最もよく用いる手段はどれですか。どのような翻訳聖書(全訳・部分訳)がありますか。家庭において聖書はどのように読まれていますか。世代(子ども、青少年、青年、成人)に応じてどのような養成が行われていますか。どのようなマス・メディアの手段が使われていますか。どの手段が重要だと考えますか。

#### 4．エキュメニカル対話における神のことば

現代世界でみことばを宣べ伝えるには、生活のあかしの一貫性が必要です。現代のキリスト信者の生活の中で、こうした生活のあかしの一貫性は見られますか。それを促進するにはどうすればよいですか。エキュメニカル対話において部分教会は『啓示憲章』の原則をどのように実践していますか。姉妹教会とのエキュメニカルな議論の中で聖書は取り上げられていますか。エキュメニカル対話は神のことばにとってどのような役割を果たしますか。神のことばに関するエキュメニカルな一致点はどのようなものですか。聖書協会世界連盟との協力は可能ですか。聖書の使用に関する対立がありますか。

#### 5．ユダヤ教徒との対話における神のことば

ユダヤ教徒との対話を優先課題としていますか。聖書に関するどのような一致点があるために役立つでしょうか。聖書が反ユダヤ主義を煽るために用いられることがありますか。

#### 6．諸宗教対話・異文化対話における神のことば

固有の聖典を有する宗教者と、キリスト教の聖書に基づいた対話を行っていますか。聖書が神の靈感によって書かれたことを信じない人が神のことばに触れることは可能ですか。神のことばは無神論者のためにも存在するのでしょうか。すべての人にとって豊かな意味をもつ「大いなる体系」として聖書に近づくことがありますか。聖書を参照しつつ異文化対話を行ったことがありますか。キリスト教共同体がセクトに対抗するために助けとなる手段は何ですか。



## 結び

「キリストのことばがあなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、論し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい」(コロサイ 3・16 - 17)。

信者の生活の中で神のことばを聞く

34 人が神と出会うには、みことばに熱心に耳を傾けることが不可欠です。人は、みことばに心を開き、みことばが心の中に生まれるようにすることによって、霊に従って生きるようになります。じつに、誰も神のことばの深みを究め尽くすことはできません。しかし、今述べた態度をとることによって初めて、みことばは人をとらえ、回心させます。そして、みことばの豊かさと秘密を見いだし、視野を広げます。ついには自由と、人間としての完全な成長を約束します(エフェソ 4・13 参照)。聖書を知ることは教会に与えられたたまものの一つです。教会は、聖霊に心を開く信者にこの知識を伝えます。

証聖者聖マクシモスはいいます。「みことばを機械的に繰り返すだけで、聞こうとしないならば、いくらみことばを語っても、その人の行動はみことばを響かせることはありません。しかし、みことばを宣べ、かつそれを行うなら、みことばは悪魔を退け、人びとの心の中に神を住まわせ、義のわざを進めることができます」(132)。そのため、人は単純さと神をあがめる祈りをもって、心の中で沈黙の内に賛美をささげなければなりません。マリアが行ったように。おとめマリアは、自分が聞いた神のことばをすべて受けとめ、愛の内にそれを生きたからです(申命記 6・5、ヨハネ 13・34 - 35 参照)。こうして、信じる者は「弟子」となり、今や「神のすばらしいことば」(ヘブライ 6・5)を味わうことができます。そのために、信じる者は神のことばを教会共同体の中で生き、近くの人にも遠くの人にも宣べ伝え、肉となったみことばであるイエスの招きのことばを実現します。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ 1・15)。

質問一覧  
(各章の終わりに掲げた質問の一覧)

序論についての質問

1. 神のことばについての今回のシノドスに特に現代的な意味を与えるような、どのような「時のしるし」が皆様の国にありますか。人びとはこのシノドスに何を期待していますか。
2. 前回の聖体についてのシノドスと、神のことばについての今回のシノドスにはどのような関係がありますか。
3. 皆様の部分教会で、聖書の体験や実践は行われていますか。それはどのようなものですか。聖書を研究するグループは存在しますか。それはどのようなもので、どんな活動をしていますか。

第1章についての質問

1. 救いの歴史における神のことばに関する知識

啓示、神のことば、聖書、聖伝、教導職に関して、信者（小教区、修道会、運動団体）はどのように考えていますか。信者は神のことばのさまざまな意味の違いを理解していますか。イエス・キリストが神のことばの中心であることを理解していますか。神のことばと聖書はどのような関係にありますか。理解が難しいことは何ですか。その理由は何ですか。

2. 神のことばと教会

神のことばに近づくこと　このことが、どのようにして、キリストのからだである教会に属することに關する認識を深め、教会の宣教への心からの参加を促しますか。神のことばと教会に関して、信者はどのように理解していますか。釈義と神学研究において、また信者が聖書に触れるとき、聖書と聖伝は適切に関係づけられていますか。信仰教育（カテケジス）は神のことばに基づいてなされていますか。聖書は十分に重視されていますか。神のことばの宣教における教導職の重要性和責務は認識されていますか。信仰に基づいて、真の意味で神のことばに耳を傾けていますか。明確にすべき点、強調すべき点は何ですか。

3. 神のことばにおける教会の信仰のさまざまなしるし

『啓示憲章』はどの程度受け入れられていますか。『カトリック教会のカテキズム』はどの程度受け入れられていますか。神のことばの使徒職において司教がもつ教導職としての特別な役割は何ですか。みことばの宣教において、叙階された奉仕者、司祭、助祭の果たす職務は何ですか（『教会憲章』25、28 参照）。信者は神のことばと奉獻生活の関係をどう理解していますか。将来の司祭の養成において神のことばをどのように用いることができますか。神の民（司祭、助祭、奉獻生活者、信徒）の中で、神のことばに関するどのような教育が必要とされていますか。

4. 神のことばとしての聖書

なぜ現代のキリスト信者は熱心に聖書を探究するのでしょうか。聖書は信仰生活にどのような影響を及ぼしますか。非キリスト者の中で聖書はどのように受け入れられていますか。知識人の中で聖書はどのように受け入れられていますか。聖書は常に正しく扱われていますか。広く見られる問題は何ですか。靈感のたまものと聖書の真理に関して、信者はどう理解していますか。信者は、聖

書の霊的な意味が、神の意図した最終的な意味であることを理解していますか。旧約はどのように受け入れられていますか。福音のほうがよく読まれる場合、福音に関する知識と読み方は十分なものです。現代、多くの人が「難しい」と考える聖書の箇所はどこですか。この問題にどう対応すればよいでしょうか。

#### 5．神のことばへの信仰

信者は神のことばをどうとらえていますか。信者は深い信仰をもって神のことばに耳を傾け、神のことばによって信仰を新たにしようとしていますか。信者は何のために聖書を読んでいますか。信者は聖書を読むときに、どのような識別基準を用いていますか。

#### 6．マリアと神のことば

なぜマリアは神のことばを聞くための模範また母なのですか。人びとは神のことばを、マリアがなされたように受け入れ、生きていますか。どうすればマリアは信者にとって、神のことばを聞き、黙想し、生きるための模範となることができるでしょうか。

### 第2章についての質問

#### 1．教会生活における神のことば

自分の教会共同体また信者の中で、神のことばはどの程度重視されていますか。どのような意味で神のことばはキリスト信者を養う糧となっていますか。キリスト教が「書物の上だけの宗教」に陥る危険はありますか。個人の生活の中で、また主日の信者の集いの中で、神のことばは敬われ、よく読まれていますか。週日に神のことばは敬われ、よく読まれていますか。典礼暦の特別な季節に神のことばは敬われ、よく読まれていますか。

#### 2．神の民の教育における神のことば

自分の共同体や信者一人ひとりに対して、神のことばに関する教えを包括的かつ全体的に伝えるためにどのようなことが行われていますか。養成中の司祭、奉献生活者、共同体の奉仕者（カテキスタなど）は、それぞれの司牧的奉仕職における聖書の扱いについて適切な養成や、定期的な継続養成を受けていますか。信徒のための継続的な養成コースはありますか。

#### 3．神のことば、典礼、祈り

信者は典礼と個人の祈りの中でどのように聖書に接していますか。信者はことばの典礼と感謝の典礼の関係をどのように理解していますか。感謝の祭儀で記念されるみことばと、キリスト信者の日常生活の関係をどのように理解していますか。神のことばは説教の中に真の意味で反映していますか。なすべき課題はどのようなものですか。ゆるしの秘跡の中で、神のことばを聞くことも同時に行われていますか。聖務日課の中で、神のことばを聞くこと、また神のことばとの対話は行われていますか。神のことばを聞き、それと対話することは、信徒の中でも行われていますか。神の民は聖書に触れる十分な機会をもっていますか。

#### 4．神のことば、福音宣教、信仰教育

第二バチカン公会議と教会の教導職の教えから見て、神のことばと信仰教育に関する積極的な側面と消極的な側面はどのようなものですか。信仰教育（キリスト教入信と継続養成）のさまざまな形の中で神のことばはどのように扱われていますか。教会共同体は、聖書に書かれた神のことばに十分な注意を払い、その研究を行っていますか。行っている場合、どのように行っていますか。さ

さまざまな人（子ども、青少年、青年、成人）に対して、どのように聖書に関する入門教育が行われていますか。聖書に関するどのような入門講座が行われていますか。

#### 5．神のことば、釈義、神学

神のことばは釈義と神学の魂となっていますか。「啓示されたみことば」としての性格は十分理解され、尊重されていますか。聖書に関する学問的研究は、適切な信仰の基盤によって促され、支えられていますか。聖書本文を扱う際の通常の方法はどのようなものですか。神学研究の中で聖書はどのような役割を果たしていますか。共同体の司牧的生活の中で聖書は十分考慮されていますか。

#### 6．神のことばと信者の生活

神の民の霊的生活に聖書はどのような影響を与えていますか。聖職者の霊的生活に聖書はどのような影響を与えていますか。信徒の霊的生活に聖書はどのような影響を与えていますか。マリアの貧しく信頼に満ちた態度は「マリアの賛歌」の中に明らかに示されていますか。なぜ物質的な豊かさが神のことばを熱心に聞くための妨げとなるのですか。感謝の祭儀や他の典礼の中で、神のことばは信仰を伝えるための強力な手段となっていますか。あるいはなっていませんか。さまざまなキリスト信者が聖書に無関心だったり、積極的な関心をもたないのはなぜですか。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」は行われていますか。それはどのような形で行われていますか。「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」を推進する要因、あるいは妨げる要因はどのようなものですか。

### 第3章についての質問

#### 1．現代世界における神のことばの宣教

司牧的経験からいって、神のことばを聞くことを促す要因、またそれを妨げる要因は何ですか。内面的な不安や、カトリック以外のキリスト教の諸教派からの刺激が信仰の刷新をもたらすことはありますか。世俗主義、この世のさまざまなメッセージからの絶え間ない攻撃、キリスト教の教えに反する生活様式などが神のことばを聞くことを妨げることがありますか。こうした諸問題がある中で、神のことばをどのように宣べ伝えるべきですか。

#### 2．聖書に容易に近づく機会

「キリスト信者には、聖書に近づく多くの機会が与えられなければならない」という『啓示憲章』22のことばはどの程度事実と合致していますか。おおよそのものでよいので、この点に関する統計資料を示してください。個人また共同体全体において聖書のみことばを聞くことは多くなっていますか。

#### 3．聖書の普及

教区共同体における聖書使徒職はどのように行われていますか。教区は司牧計画を立てていますか。司牧計画を実行する人は適切な養成を受けていますか。人びとはカトリック聖書連盟について知っていますか。みことばと出会うためのどのような手段が用いられていますか（聖書研究、みことばによる祈りの会、聖書講座、聖書の日、「霊的読書（レクチオ・ディヴィナ）」）。キリスト信者が最もよく用いる手段はどれですか。どのような翻訳聖書（全訳・部分訳）がありますか。家庭において聖書はどのように読まれていますか。世代（子ども、青少年、青年、成人）に応じてどのような養成が行われていますか。どのようなマス・メディアの手段が使われていますか。どの手段が重要だと考えますか。

#### 4．エキュメニカル対話における神のことば

現代世界でみことばを宣べ伝えるには、生活のあかしの一貫性が必要です。現代のキリスト信者の生活の中で、こうした生活のあかしの一貫性は見られますか。それを促進するにはどうすればよいですか。エキュメニカル対話において部分教会は『啓示憲章』の原則をどのように実践していますか。姉妹教会とのエキュメニカルな議論の中で聖書は取り上げられていますか。エキュメニカル対話は神のことばにとってどのような役割を果たしますか。神のことばに関するエキュメニカルな一致点はどのようなものですか。聖書協会世界連盟との協力は可能ですか。聖書の使用に関する対立がありますか。

#### 5．ユダヤ教徒との対話における神のことば

ユダヤ教徒との対話を優先課題としていますか。聖書に関するどのような一致点があるために役立つでしょうか。聖書が反ユダヤ主義を煽るために用いられることがありますか。

#### 6．諸宗教対話・異文化対話における神のことば

固有の聖典を有する宗教者と、キリスト教の聖書に基づいた対話を行っていますか。聖書が神の靈感によって書かれたことを信じない人が神のことばに触れることは可能ですか。神のことばは無神論者のためにも存在するでしょうか。すべての人にとって豊かな意味をもつ「大いなる体系」として聖書に近づくことがありますか。聖書を参照しつつ異文化対話を行ったことがありますか。キリスト教共同体がセクトに対抗するために助けとなる手段は何ですか。

注

- 1 第二バチカン公会議『啓示憲章』2 ( *Dei Verbum* )。
- 2 ドイツのルペルトウス『聖霊のわざについて』( *Rupertus Abbas Tuitiensis, De operibus Spiritus Sancti*, I, 6: *SC* 131, 72-74 )。
- 3 レオ十三世回勅『プロヴィデンティッシムス・デウス( 1893 年 11 月 18 日 )』( *Providentissimus Deus: DS* 1952 [3293] )、ベネディクト十五世回勅『スピリトウス・バラクリトウス( 1920 年 9 月 15 日 )』( *Spiritus Paraclitus: AAS* 12 [1920], 385-422 )、ピオ十二世回勅『ディヴィノ・アフランテ・スピリトウ( 1943 年 9 月 30 日 )』( *Divino afflante Spiritu: AAS* 35 [1943], 297-325 ) 参照。
- 4 世界代表司教会議第 2 回臨時総会最終報告『神のことばで世の救いのためにキリストの秘義を祝う教会( 1985 年 12 月 7 日 )』( *Synodus Episcoporum, Relatio finalis Synodi episcoporum Exeunte coetu secundo: Ecclesia sub verbo Dei mysteria Christi celebrans pro salute mundi: Enchiridion del Sinodo dei Vescovi*, 1, Bologna 2005, 2733-2736 )。
- 5 ベネディクト十六世「『啓示憲章』発布 40 周年国際会議参加者へのあいさつ( 2005 年 9 月 16 日 )」( *Ad Conventum Internationalem La Sacra Scrittura nella vita della Chiesa: AAS* 97 [2005], 957 )、パウロ六世使徒的書簡『スンミ・デイ・ヴェルブム( 1963 年 11 月 4 日 )』( *Summi Dei Verbum: AAS* 55 [1963], 979-995 )、ヨハネ・パウロ二世「一般謁見( 1985 年 5 月 22 日 )」( *L'Osservatore Romano* [23 maii 1985], 6 )、同「教会における聖書解釈について( 1993 年 4 月 23 日 )」( *Discorso sull'interpretazione della Bibbia nella Chiesa: L'Osservatore Romano* [25 aprilis 1993], 8-9 )、ベネディクト十六世「お告げの祈りのことば( 2005 年 11 月 6 日 )」( *L'Osservatore Romano* [7-8 novembris 2005], 5 ) 参照。
- 6 第二バチカン公会議『啓示憲章』21。
- 7 聖ヒエロニモ『コヘレトの言葉注解』( *S. Hieronymus, Commentarius in Ecclesiasten*, 313: *CCL* 72, 278 )。
- 8 第二バチカン公会議『啓示憲章』22。
- 9 教皇庁聖書委員会『キリスト教徒の聖書におけるユダヤの民とその聖書( 2001 年 5 月 24 日 )』( *Pontificia Commissio Biblica, Le peuple juif et ses Saintes Écritures dans la Bible chrétienne: Enchiridion Vaticanum* 20, Bologna 2004, pp. 507-835 ) 参照。
- 10 第二バチカン公会議『啓示憲章』2。
- 11 同。
- 12 同。
- 13 同参照。
- 14 『ローマ・ミサ典礼書( 規範版第 3 版、2002 年 )』総則 368。
- 15 パウロ六世『第 4 回フランス宗教教育会議( 1964 年 4 月 1 - 3 日 )への手紙』( *Lettre au IV<sup>ème</sup> Congrès national français de l'enseignement religieux. La Documentation Catholique* n° 1422 [19.04.1964], p. 503 )。
- 16 大聖グレゴリオ『道德論』( *S. Gregorius Magnus, Moralia*, 20, 3: *CCL* 143A, 1050 )。
- 17 第二バチカン公会議『啓示憲章』3。
- 18 聖エフラエム『楽園についての賛歌』( *S. Ephraem, Hymni de paradiso*, V, 1-2: *SC* 137, 71-72 )。
- 19 第二バチカン公会議『啓示憲章』4。
- 20 聖イレネオ『異端反駁』( *S. Irenaeus, Adversus Hæreses* IV, 34, 1: *SC* 100, 847 [小林稔訳、『キリスト教教父著作集 3 / エイレナイオス異端反駁』教文館、2000 年、128 頁] )。

- 21 オリゲネス『ヨハネ福音書注解』(Origenes, *Commentarii in Johannem* V, 5-6: SC 120, 380-384〔小高毅訳、『ヨハネによる福音書注解』創文社、1984年、166 - 167頁〕)。
- 22 聖ベルナルド『「天使ガブリエルは……遣わされた」(ルカ1章26節以下)についての説教』(S. Bernardus, *Super Missus est*, Homilia IV, 11: PL 183, 86) 参照。
- 23 第二バチカン公会議『啓示憲章』3。
- 24 同24参照。
- 25 同4参照。
- 26 同5参照。
- 27 同。
- 28 同2、5参照。
- 29 同2参照。
- 30 同21参照。
- 31 イサク・デ・ステラ『説教』(Isaac de Stella, *Sermo* 51: PL 194, 1862-1863; 1865)。
- 32 聖アンブロジオ『ルカ福音書注解』(S. Ambrosius, *Expositio Evangelii secundum Lucam* 2, 19: CCL 14, 39) 参照。
- 33 第二バチカン公会議『啓示憲章』7。
- 34 同26参照。
- 35 同8。同21参照。
- 36 『カトリック教会のカテキズム』825参照。
- 37 第二バチカン公会議『啓示憲章』8。
- 38 同7。
- 39 同10。
- 40 同9。トリエント公会議教令『聖書と使徒の伝承について』(Decretum de libris sacris et de traditionibus recipiendis: DS 1501) 参照。
- 41 第二バチカン公会議『啓示憲章』10。
- 42 同8。
- 43 同21。
- 44 『カトリック教会のカテキズム』120参照。
- 45 J. Ratzinger, *Un tentativo circa il problema del concetto di tradizione*: K. Rahner – J. Ratzinger, *Rivelazione e Tradizione*, Brescia 2006, 27-73 参照。
- 46 第二バチカン公会議『啓示憲章』9。同24参照。
- 47 同21。
- 48 同11。
- 49 教皇庁聖書委員会『教会における聖書の解釈(1993年4月15日)』(Pontificia Commissio Biblica, *L'interprétation de la Bible dans l'Église*, cap. I, C; D: Enchiridion Vaticanum 13, Bologna 1995, pp. 1555-1733) 参照。
- 50 第二バチカン公会議『啓示憲章』第3 - 第6章。
- 51 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『信仰と理性(1998年9月14日)』13 - 15( *Fides et Ratio*: AAS 91 [1999], 15-18 )。
- 52 教皇庁聖書委員会『教会における聖書の解釈(1993年4月15日)』(Pontificia Commissio Biblica, *L'interprétation de la Bible dans l'Église*, cap. I, F: Enchiridion Vaticanum 13, Bologna 1995, pp. 1628-1634) 参照。
- 53 Cf. *ibidem*, cap. IV, A; B, pp. 1703-1715.
- 54 『カトリック教会のカテキズム』117参照。

- 55 教皇庁聖書委員会『教会における聖書の解釈(1993年4月15日)』(Pontificia Commissio Biblica, *L'interprétation de la Bible dans l'Église*, cap. I: Enchiridion Vaticanum 13, Bologna 1995, pp. 1568-1634) 参照。
- 56 第二バチカン公会議『啓示憲章』12。『カトリック教会のカテキズム』109 - 114 参照。
- 57 教皇ベネディクト十六世「スイス司教団への演説(2006年11月7日)」(*Discorso ai Vescovi della Svizzera: L'Osservatore Romano* [10 novembris 2006], 4)。
- 58 『朗読聖書の緒言(規範版第2版、1981年)』8。
- 59 第二バチカン公会議『啓示憲章』15 - 16 参照。
- 60 聖アウグスチヌス『七書の諸問題』(S. Augustinus, *Quæstiones in Heptateucum*, 2, 73: PL 34, 623) 参照。第二バチカン公会議『啓示憲章』16 参照。
- 61 大聖グレゴリオ『エゼキエル書講話』(S. Gregorius Magnus, *Homiliæ in Hiezechielem*, I, 6, 15: CCL 142, 76)。
- 62 第二バチカン公会議『啓示憲章』18 - 19、教皇ヨハネ・パウロ二世「一般謁見(1985年5月22日)」(*L'Osservatore Romano* [23 maii 1985], 6) 参照。
- 63 第二バチカン公会議『啓示憲章』1。
- 64 同 21。
- 65 大聖グレゴリオ『書簡摘要』(S. Gregorius Magnus, *Registrum Epistolarum* V, 46, 35: CCL CXL, 339)。
- 66 第二バチカン公会議『啓示憲章』21 参照。
- 67 同。
- 68 『カトリック教会のカテキズム』115 - 119 参照。
- 69 カルトゥジア会のグイゴ二世『修道院生活者の梯子あるいは祈りの方法についての論考』(Guigus II Prior Carthusiæ, *Scala claustralium sive tractatus de modo orandi*: PL 184, 475-484)。
- 70 第二バチカン公会議『啓示憲章』12。
- 71 同 23。
- 72 『朗読聖書の緒言(規範版第2版、1981年)』9。
- 73 ダマスコのペトロス『フィロカリヤ』(Petrus Damascenus, *Liber II*, vol. III, 159: *La Filocalia*, vol. 3<sup>o</sup>, Torino 1985, 253)。
- 74 第二バチカン公会議『啓示憲章』21。
- 75 教皇庁聖職者省『カテケジス一般指針(1997年8月15日)』47 (Congregatio Pro Clericis, *Directorium generale pro catechesi*: Enchiridion Vaticanum 16, Bologna 1999, pp. 663-665) 参照。
- 76 第二バチカン公会議『典礼憲章』35 (*Sacrosanctum Concilium*)。
- 77 同 7。
- 78 同 24。
- 79 第二バチカン公会議『啓示憲章』21。
- 80 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年期の初めに(2001年1月6日)』36 (*Novo Millennio Ineunte*: AAS 93 [2001], 291)。
- 81 『朗読聖書の緒言(規範版第2版、1981年)』参照。
- 82 第二バチカン公会議『啓示憲章』24。
- 83 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年期の初めに(2001年1月6日)』39 (*Novo Millennio Ineunte*: AAS 93 [2001], 293)。
- 84 教会法第 762 条参照。



- 85 教皇庁聖職者省『カテケジス一般指針(1997年8月15日)』第1部第2章(Congregatio Pro Clericis, *Directorium generale pro catechesi*: Enchiridion Vaticanum 16, Bologna 1999, pp. 684-708) 参照。
- 86 このことと関連して、民間信心と神のことばの関係に注目する教皇庁典礼秘跡省『民間信心と典礼に関する原則とガイドライン(2002年4月9日)』87-89(Congregatio de Cultu Divino et Disciplina Sacramentorum, *Direttorio su pietà popolare e liturgia*) を考慮すべきである。
- 87 教皇庁聖職者省『カテケジス一般指針(1997年8月15日)』127(Congregatio Pro Clericis, *Directorium generale pro catechesi*: Enchiridion Vaticanum 16, Bologna 1999, p. 794)
- 88 同。
- 89 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒憲章『ゆだねられた信仰の遺産(1992年10月11日)』4(*Fidei Depositum*: AAS 86 [1994], 117) 参照。
- 90 第二バチカン公会議『啓示憲章』24。レオ十三世回勅『プロヴィデンティッシムス・デウス(1893年11月18日)』第二部末(*Providentissimus Deus*: ASS 26 [1893-94], 269-292) ベネディクト十五世回勅『スピリトゥス・パラクリトゥス(1920年9月15日)』第3部(*Spiritus Paraclitus*: AAS 12 [1920], 385-422) 参照。
- 91 第二バチカン公会議『啓示憲章』12、同『教会の宣教活動に関する教令』22(*Ad Gentes*) 参照。
- 92 第二バチカン公会議『司祭の養成に関する教令』16(*Optatam Totius*) 教会法第252条、東方教会法第350条参照。
- 93 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『信仰と理性(1998年9月14日)』序文(*Fides et Ratio*: AAS 91 [1999], 5)。
- 94 第二バチカン公会議『啓示憲章』23。
- 95 聖ヒエロニモ『イザヤ書注解』(S. Hieronymus, *Commentarii in Isaiam*, Prol.: PL 24, 17)。
- 96 第二バチカン公会議『啓示憲章』25。
- 97 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年期の初めに(2001年1月6日)』39(*Novo Millennio Ineunte*: AAS 93 [2001], 293)。
- 98 第二バチカン公会議『啓示憲章』25。
- 99 聖アウグスチヌス『詩編注解』(S. Augustinus, *Enarrationes in Psalmos* 85, 7: CCL 39, 1177)。
- 100 教皇庁聖書委員会『教会における聖書の解釈(1993年4月15日)』(Pontificia Commissio Biblica, *L'interprétation de la Bible dans l'Église*, IV, C. 3: Enchiridion Vaticanum 13, Bologna 1995, p. 1725 [和田幹男訳、「教会における聖書の解釈」、英知大学キリスト教文化研究所『キリスト教文化研究所紀要』第16巻第1号、2001年、313頁])。
- 101 カルトゥジア会のガイゴ二世『修道院生活者の梯子あるいは祈りの方法についての論考』(Guigus II Prior Carthusiæ, *Scala claustralium sive tractatus de modo orandi*: PL 184, 475-484) 参照。
- 102 第二バチカン公会議『司祭の養成に関する教令』4、教皇ヨハネ・パウロ二世シノドス後の使徒的勸告『現代の司祭養成(1992年3月25日)』47(*Pastores Dabo Vobis*: AAS 84 [1992], 740-742) 参照。
- 103 教皇ベネディクト十六世「ローマとラツィオ州の青年との集会における講話(2006年4月7日)」(*Incontro con i giovani romani*: *L'Osservatore Romano* [7 aprilis 2006], 5)、「2006年世界青年の日メッセージ(2006年2月22日)」(*L'Osservatore Romano* [27-28 februarii 2006], 5)。

- 104 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年期の初めに(2001年1月6日)』39(*Novo Millennio Ineunte: AAS* 93 [2001], 293)。
- 105 教皇ベネディクト十六世「『啓示憲章』発布40周年国際会議参加者へのあいさつ(2005年9月16日)」(*Ad Conventum Internationalem La Sacra Scriptura nella vita della Chiesa: AAS* 97 [2005], 957)。
- 106 教皇ベネディクト十六世「2006年世界青年の日メッセージ(2006年2月22日)」(*L'Osservatore Romano* [27-28 februarii 2006], 5)。
- 107 教皇ベネディクト十六世「『啓示憲章』発布40周年国際会議参加者へのあいさつ(2005年9月16日)」(*Ad Conventum Internationalem La Sacra Scriptura nella vita della Chiesa: AAS* 97 [2005], 957)。
- 108 教皇ヨハネ・パウロ二世シノドス後の使徒的勸告『奉献生活(1996年3月25日)』94(*Vita Consecrata: AAS* 88 [1996], 469-470) 参照。
- 109 聖チプリアノ『ドナトゥスに送る』(S. Cyprianus, *Ad Donatum*, 15; *CCL* IIIA, 12〔吉田聖訳、「ドナトゥスに送る」、『南山神学』第24号(2000年) 199頁])。
- 110 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『新千年期の初めに(2001年1月6日)』40(*Novo Millennio Ineunte: AAS* 93 [2001], 294)。
- 111 教皇ベネディクト十六世回勅『神は愛(2005年12月25日)』(*Deus Caritas Est: AAS* 98 [2006], 217-252) 参照。
- 112 同 20-25 (*AAS* 98 [2006], 233-237) 参照。
- 113 聖アウグスチヌス『キリスト教の教え』(S. Augustinus, *De doctrina Christiana*, I, XXXV, 39; XXXVI, 40; *PL* 34, 34〔加藤武訳、『アウグスティヌス著作集6』教文館、1988年、70-71頁])。
- 114 第二バチカン公会議『啓示憲章』22。教会法第825条、東方教会法第654条、第662条第1項参照。
- 115 第二バチカン公会議『啓示憲章』25 参照。
- 116 教皇庁聖職者省『カテケジス一般指針(1997年8月15日)』160-162(*Congregatio Pro Clericis, Directorium generale pro catechesi: Enchiridion Vaticanum* 16, Bologna 1999, pp. 845-847) 参照。
- 117 第二バチカン公会議『修道生活の刷新・適応に関する教令』6(*Perfectæ caritatis*)。
- 118 聖アンブロジオ『書簡』(S. Ambrosius, *Epistula* 49, 3; *PL* 16, 1154B) 参照。
- 119 教皇ヨハネ・パウロ二世シノドス後の使徒的勸告『奉献生活(1996年3月25日)』94(*Vita Consecrata: AAS* 88 [1996], 469)。
- 120 第二バチカン公会議『エキュメニズムに関する教令』21(*Unitatis Redintegratio*) 参照。
- 121 第二バチカン公会議『啓示憲章』22 参照。
- 122 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『キリスト者の一致(1995年5月25日)』(*Ut unum sint: AAS* 87 [1995], 921-982)。教皇庁キリスト教一致推進評議会『エキュメニズム新指針』(*Pontificium Consilium ad Unitatem Christianorum Fovendam, Directorium œcumenicum noviter compositum: AAS* 85 [1993], 1039-1119) も参照。
- 123 教皇ベネディクト十六世「キリスト教一致祈禱週間を終える夕べの祈りでの講話(2007年1月25日)」(*Allocutio: Il mondo attende la testimonianza comune dei cristiani: L'Osservatore Romano* [27 ianuarii 2007], 4-5)。
- 124 第二バチカン公会議『教会の宣教活動に関する教令』22、同『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』2-4(*Nostra Ætate*)。教皇庁教理省宣言『主イエス イエス・キリストと教会の救いの唯一性と普遍性について(2000年8月6日)』20-22

- ( Congregatio pro Doctrina Fidei, *Declaratio de Iesu Christi Ecclesiae unitate et universalitate salvifica Dominus Iesus*: AAS 92 [2000], 761-764 ) 参照。
- 125 教皇ヨハネ・パウロ二世「シンポジウム『キリスト教の領域における反ユダヤ主義の起源』参加者へのあいさつ(1997年10月31日)』( *Ai partecipanti all'incontro di studio su Radici dell'antigiudaismo in ambiente cristiano: Insegnamenti di Giovanni Paolo II*, 20/2, Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano 2000, 725 )
- 126 教皇庁聖書委員会『キリスト教徒の聖書におけるユダヤの民とその聖書(2001年5月24日)』( Pontificia Commissio Biblica, *Le peuple juif et ses Saintes Écritures dans la Bible chrétienne*: Enchiridion Vaticanum 20, Bologna 2004, pp. 507-835 )
- 127 第二バチカン公会議『啓示憲章』14 - 16 参照。
- 128 教皇ベネディクト十六世「2006年世界平和の日メッセージ 平和は真理のうちに(2005年12月8日)』( *Insegnamenti di Benedetto XVI*, I, Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano 2006, 954-962 ) 同「2007年世界平和の日メッセージ 平和の中心である人間の人格(2006年12月8日)』( *L'Osservatore Romano* [13 decembris 2006], 4-5 ) 参照。
- 129 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『要理教育(1979年10月16日)』53 ( *Catechesi Tradendæ*: AAS 71[1979], 1320 )
- 130 第二バチカン公会議『現代世界憲章』4 ( *Gaudium et Spes* )
- 131 同 11。
- 132 証聖者聖マクシモス『神学とオイコノミアについての二〇〇の断章』( S. Maximus Confessor, *Capitum theologorum et œconomicorum duæ centuriæ* IV, 39: PG 90, 1084 )

#### 訳注

- 1 「影響作用史」( Wirkungsgeschichte )は、ドイツの現代哲学者 H・G・ガダマー( Hans-Georg Gadamer 1900 - 2002 年 )が『真理と方法』( *Wahrheit und Methode* 1960 年 [邦訳『真理と方法』饒田収訳、法政大学出版会、1986 年])で述べた解釈学の概念。過去が過去との断絶に対する歴史的意識にもかかわらず、依然としてわれわれにいつもすでに語りかけ、働きかけていること。
- 2 「大いなる体系」( Great Code )は、現代カナダの文学批判理論家ノースロップ・フライ( Northrop Frye 1912 - 1991 年 )が『大いなる体系』( *The Great Code: The Bible and Literature* 1982 年 [邦訳『大いなる体系 聖書と文学』伊藤誓訳、法政大学出版局、1995 年])で述べた語。本書の中でフライは聖書を神話という大いなる体系として位置づけた。

#### 略号

AAS *Acta Apostolicæ Sedis*

ASS *Acta Sanctæ Sedis*

CCL *Corpus Christianorum Series Latina*

DS H. Denzinger-A. Schönmetzer, *Enchiridion Symbolorum. Definitionum et Declarationum de rebus fidei et morum*

PG *Patrologia Græca*

PL *Patrologia Latina*

SC *Sources Chrétiennes*